創立30周年によせて

会長　加藤安彦

36年前（1959年）、神奈川県内の皮膚科医の会を作る相談会のセッティングを仰せつかり［神皮創刊号３ページ参照］、間もなく（1960年）神奈川県皮膚科懇談会が誕生しました。その後、神奈川県皮膚科医会へと発展（S41年、1966年）して、今年はその30周年にあたり、平成８年７月７日関内新井ホールで第91回例会と記念祝賀会が盛大に催されました。

特に今回の行事には、大変ご多忙の中を川口県医師会長初め多数のご来賓と、会員が大勢参加して会を盛り上げて下さいました。また、功労者表彰や東京金管五重奏団による素晴らしい記念演奏など、神皮会役員が一致協力して運営にあたって下さったことが、盛会に結びついたものと思います。あしかけ37年間、これらの会に関わって参りました私にとって、感慨ひとしおのものがありました。

今回の総会での役員改選にあたっては、選考委員会等で検討を重ねた結果、役員は若返りを図りながら徐々に交代する方針に従って、今期は副会長と正・副幹事長が代わり、幹事並びに監事も一部交代することになり、総会で承認されました。今回勇退された役員の方々には長い間いろいろご苦労様でした。また、これからの２年間新しい役員が加わった幹事会、常任幹事会の活躍を期待し、一緒に頑張って参りますので、会員の皆様の温かいご支援、ご協力をお願い致します。

ところで、今さら申すまでもなく、わが国は高度経済成長の終息にともない国家財政が逼迫し、その結果、総費用の抑制を図るため、行政改革を含めた各分野の構造改革論議が活発になされるなかで、特に医療保険財政削減に向けては強い決意のもとに、医療の提供体制と保険財政の整合性を保つための方策が論じられています。

ながても、医療保険審議会や老人保健福祉審議会等で建議が予定されている項目のなかには、マスコミ等でいろいろ報じられているように、診療の第一線で働いている私たちにとって、大変大きな影響を及ぼしかねない重大な問題が数多く含まれ、その一部は平成９年度から実施に移されようとしています。

更に、保険医療機関に対する新「指導大綱・監査要綱」では、レセプトの１件あたりの平均点数が、一定の割合を超える高点数の医療機関に対して、まず集団的個別指導がなされることになり、神奈川県ではいよいよ平成９年１月より実施に移されようとしています。

このように、医療費削減に向けていろいろの施策が次から次と打たれる状況のなかで、私たち皮膚科医も安閑として座視することなく、生き残りをかけてあらゆる対策を模索しながら、新しい局面を切り開く努力が必要と思われます。

神皮会では、私たち自身のレベルアップのための卒後研修は無論のこと、健保問題にも積極的に取り組んでまいりますが、在宅医療、学校医や産業医など、新しい分野に向けての活動を始めるため、それぞれ検討委員会を設けることにいたしました。これらの分野で既に活動されている方はもちろん、関心をお持ちの方々のご参加をぜひお願い致します。

（1996年12月）

思い出すこと

事務委託と横領事件

中　野　政　男

20年前のことで、もう時効だろうから、記録にとどめておく。

医会のお金が大量に使い込まれた事件の事である。

このことは「神皮」創刊号P.７－８に安西前幹事長が簡単に書いて居られるが、30年の節目に雑録として記載しておく。

神奈川県皮膚科医会が発足した当座は庶務会計事務を、常任幹事（主に下田、富沢、花岡、江川の諸先生）で分担してやっていたが、会が県医師会の分科会であることから事務所を県医師会内に置くのが筋と言うことで県医師会に委託することにした。

これは県医師会報247号（昭47.９.10）13pに、８月11日付、神医333号で公示された。県医の担当は事務局業務二課課長　澤　浩　氏。

初めは会員の管理と連絡、会費徴収に限られていたのを昭和49年からは経理も委託した。

幹事一同これで雑用から解放されてサッパリしたと安心していた所が、やってみると会費の徴収はじめ事務処理がサッパリ旨く行かない。

医師会の重鎮、亀田先生を通して県医に再三「事務推進方懇請」（頼んでやって貰っているのだから文句を言うわけには行かない）するやら、困った困ったと言いながらも、何とか年３回の例会幹事会と総会をこなしてきた。

52年３月発行予定の名簿が遅滞した挙げ句、出来上がった物が誤植脱落が多くて全く使いものにならず、幹事長の安西君は頭を抱えて苦労の毎日で、こんな事なら自分たちでやった方が良いと言う気分になってきた。

52年５月、昭和51年度歳入歳出決算書が届いた。

歳　　入	2,100,605	(2,192,605)
歳　　出	1,675,735	(1,342,190)
差引残高	424,870	(850,415)

この明細を見て疑念を抱いたのは安西幹事長である。

こちらの控えでは括弧内の筈である。何かおかしいと言うので会計調査が始まった。

出入伝票と領収書を突き合わせ虱潰しに調べ上げた。伝票に名前の挙がっている方達は次のような電話聴聞を受けた。

「モシモシ、会長さん。８月21日何をしてました？」

「一寸待ってくれ、カレンダーを見るから。孫を連れて鵠沼に泳ぎに行って、夜は早く寝た」

「グランドパレスで編集委員会やっていませんね」

「知らないねェ、何かあったの？」

「私は支部団交で終日缶詰、この日に委員会をやってお金が出ているんですよ」

「中西君、先生は11月４日健保懇話会をやりましたか？」

「その日は終日レセプト書きですよ」

かくして常任幹事の多くは電話査問を受け、賛助会社は賛助会費と広告代領収書の付け合わせをやらされた。その結果判ったことは、幹事不在の日に委員会夕食代の伝票があったり、出金伝票のみで領収書なしとか賛助会費が納入されていなかったとかで、要するに不正支出と収入もれで40万余の欠損が判明。

安西幹事長「私が行って来る」と明細な書類を作って県医に古藤理事を訪ねて説明、６月４日安西、中野と清川、吉田、吹雪各理事、浅田局長とで医師会側と会談して医師会側は納得して、６日に澤課長聴聞会を開くことを約束して別れた。

その翌日安西君に「一切を返却する。詫び証文をかく」と言う連絡があり、20日医師会館で安西、中野と吹雪理事、浅田局長立ち会いの上現金¥413,545を受け取った。積み上げた札束を、確認してくれと、差し出し安西君が一枚一枚数え上げて

「ハイ確かに御座います」

「ではこれが本人の詫び状です」で会談終了。

そばで見ていた私は医師会側が終始「申し訳ありませんでした」と一言も言はなかったことが不思議で、あくまでも澤個人の使い込みで処理し通したと了解した。腹が立ったので

「此のお金は医師会から出たのですか？」と聞いたら、本人の解雇退職金を1/3にして出したと言うことであった。

詫び状は内科医学会の原稿用紙にペン書きの

「昭和51年度神奈川県皮膚科医会経理に関し多大のご迷惑をおかけ致し真に申し訳ございませんでした。御指摘の金額（別紙）については直ちに神奈川県医師会を通じてご返却致します」という会長宛の物で、別紙には

収入もれ	80,000
不正支出	333,545
計	413,545

と、至極アッケラカンとした物であった。

あの課長は一体何に使ったのだろうと言うのが不思議で、後で色々聞いてみた所では、バー等で「医師会の澤先生」と呼ばれて大変良い気分になっていたらしいと言うことで、半年で40万は当時ではささやかな豪遊であったかも知れない。

これが契機で、県委託を止めることにして、日皮学会の佐野事務長さんの了解を得て、五十嵐会長宛「52年４月１日より事務委託を、日本皮膚科学会事務局に移管致します」という名目上の文書を出して県医師会から離脱、関東労災病院に事務所を移し、かの有名な事務長永戸さんが後をやってくれたのは皆様御存知の通り。

つまらないことを思い出したものだが、この事を通じて私が驚嘆したのは安西君の徹底した処理方法で、事務能力に乏しい私などはただ指をくわえて見ているだけの情けなさ。矢張り大きい病院の副院長ともなると、安西君といい加藤君といいその有能さは大したもので、こういう方に支えられて20余年の会長を務めた幸福を今更のように感謝している。

そして何時どんなことで調べられるか判らないと言う経験から、以来日記を付け続けて今日に至っておりますデス。

「六六会」のこと

安西　喬

「神皮」30周年記念特集号の原稿のご依頼を受けました。しかし丁度３年前、1993年12月20日発刊の「神皮」創刊号に、「神奈川県皮膚科懇話会・神奈川県皮膚科医会　初期の頃の思い出」と題して、原稿を寄せて掲載となりましたが、今それを読み返して見ても、これに追加する程の事は特別なく、今日迄30年という長い年月を経過して来た事に沁々と感慨に耽るだけです。昨今私から見て申し分なく発展し活発な活動もされて、30周年を迎えておられる姿を、心からお慶び申し上げるのみです。現在の執行部に関わっておられる方々の日頃のご苦労に深く敬意を捧げます。

神奈川県皮膚科医会の直属ではありませんが、会員有志のゴルフ同好会に「六六会」というものがあります。この会は第１回が1966年12月８日（木）戸塚カントリークラブで開催され、その後これを絡めて「六六会」と呼称されたものです。第１回に出席された方は、安西喬、大森周三郎、亀井義明、佐藤允康、辻知躬、中野政男、野崎明、町田（高柳）義夫、丸山惣喜の９名でした。以後、隔月年６回開催の予定が着実に実行され、30年経って去る11月17日（日）厚木国際カントリー倶楽部で、第180回例会が開催され見事30周年を迎えました。現在の「六六会会員」は朝倉茂夫、天野文武、安西喬、伊東文行、浦野一志、小川英、小野敏、片倉仁志、金丸哲山、鎌田英明、北原敬二、日下部芳志、栗原誠一、定方永吉、定方恭一、清水茂、高柳義夫、戸沢孝之、中野政男、中村宣夫、新関寛二、野崎明、花岡宏和、早川浩太郎、林輝信、原紀道、眞海文雄、松山孝の28名になっております。何分にも日曜日開催という条件に縛られる為、ゴルフ場の予約確保に難渋し、神奈川県皮膚科医会としてオープンされた規模にする事は到底不可能な事情から、closedな会として経過しています。現在、湘南シーサイド、箱根湖畔、厚木国際で２回ずつで、年６回をどうにか凌いでおります。始め丸山惣喜先生に会長をお願いし、先生が逝去された後、中野政男先生が会長をされていましたが、現在私にお針が回って来ています。一方、主計長は、初代中野政男から林輝信、定方恭一、原紀道、日下部芳志と引き継がれ罰金、お祝い金の財布を預かっています。この六六会では、第50回記念（1975年）にハワイ（オアフ島、カウアイ島）に出掛けた事を始め、100回記念（1983年）にはグアムに行ったり、1987年１月には再びハワイ（オアフ島）に行き、その他台湾（1985年）、沖縄（1981年、1983年）、北海道（1979年）などに遠征して、楽しい思い出を沢山残して来ております。近年若い年齢の方々を補充して一つの老化対策をとっておりますが、老年組も色々な名目の罰金を取られながら、それにもめげず元気に参加しています。今後も活発に継続されて行く事でしょう。六六会の記録は毎回例会のスコアを始め当日の記事が幹事によって克明に記録され、第１回から第100回迄を１冊に、第101回から第156回迄を１冊に纏めて製本して残されています。この様な事は、全国皮膚科医のプライベート・ゴルフコンペの話では聞いた事がありません。希有なる一例ではないでしょうか。この様な六六会の30年の歴史は、神奈川県皮膚科医会の同じ30年の歴史の中で、ごく一部の有志会員の事柄に過ぎませんが、それはそれで矢張り神奈川県皮膚科医会の流れを汲む人達がこれ迄築いて来た事で、誠に貴重なお目出度い歴史と思いますし、今後も大事にして行かねばならないと思います。

30周年によせて

戸沢皮膚科医院　戸澤　孝

会が発足してもう30年になりますか。会が活発に動いているためでしょうか、この30年が長い歳月とは感じることが出来ません。

私は昭和40年に小田原市で自宅開業致しました。当時の私は、保険診療に伴う煩わしさのためか、毎日を何となく割り切れない気持ちで過ごしておりましたが、その内、神奈川県皮膚科医会の誕生の知らせを聞き及ぶことになりました。確か初期には、横浜市立医科大学の野口教授と警友病院の大森先生のお二人が音頭を取られたと記憶しておりますが、偶々私は野口教授とは大学で同窓でしたので早速入会させて頂きました。この会の講演とその後の懇親会に出席しますといつも何かしらホッとした気持ちになったものでした。

余程以前のことになりますが、小田原でこの医会が開催されたことが印象深く残っております。その当時小田原市立病院にいらした加藤安彦先生のご盡力で箱根に一泊しての会でした。その際、偶々東北大学名誉教授の伊藤実先生が鎌倉でしたかご滞在されておられましたので、先生をお招きさせて頂きました。その当時は会員数が現在とは比較にならないほど少ないものでしたが、大部分の会員の参集が得られ、大盛会でした。当夜、伊藤先生を囲んで楽しい歓談があり、私も皮膚グロームスの研究を始めた経緯などを申し上げました。

この会は日本皮膚科医会と少し異なって、捉える演題が我々実地医家に親しみ易いこと、これに加えて、皆会員が出身校をこだわらず、自由な明るい交友関係にあること、これ等が会の発展に繁がっていることと思います。

尚、附したいことは、代々の会長が人間味豊かな優秀な先生であったこと、又会員に勝れた方が多いこと、これに加えて神奈川県には４つの大学があり、レベルの向上に寄与されていることなどがこの会の発展を支えて下さっていると痛感しています。

最後に、今後会の益々の進展をお祈りすると共に、創立30周年を心よりお祝い申し上げます。

30周年によせて

廻　神　輝　家

神奈川県皮膚科医会創立30周年をむかえ本当におめでとうございます。心よりお祝い申しあげます。今日の皮膚科医会の存在は各歴代の会長をはじめ役員・会員の協力努力があってこそ立派な土台が出来あがったものと思います。人にたとえれば30歳、立派な成人ですが医学はまだまだ先が広く永く前途洋々たるものです。

よくいわれることですが神奈川県皮膚科医会はよく人が集まる。そして一種独特な他の学会とは違った雰囲気があるといわれますが、これらも各委員会が種々検討を重ね、当番幹事らと協力して開催しているからと思います。時には診察室をモデルにして医師と患者、質疑に応答するといった具合に、これらはたしかに他の学会ではみられない光景の一つかと思います。何れにせよお世辞として割引いても医会独自の特色をつくりだしているものと思われます。

私も何年か役員をさせていただいておりますが勿論会員の向上を目的として運営する一方で一般市民の方々に対しても皮膚科といういわゆる皮膚疾患をよく理解していただきたいということにも力をいれて来たと思っております。皮膚という臓器を理解していただくことです。特に毎年11月12日の「皮膚の日」には一般市民を対照にわかりやすく講演を行い、更に無料相談をうけるということは皮膚科を理解していただくという点においても非常によい行事だと思っております。特に最近ではアトピー性皮膚炎とか、ステロイド外用剤の是非などについての相談も多く患者と医師との関連も深くなりつつあるという印象をうけました。

医師はつねに診療、研究、教育と３つの大きなものを背負っております。近く21世紀をむかえるわけですが高齢者社会になることは間違いないと云われております。従って高齢者特有の皮膚疾患の増加、症状の変化、更には新しい疾患の出現なども考えられます。更にこれらに対する予防、福祉など益々複雑化してくることが考えられます。これらの重責の一端を果たしてくれる場が神奈川県皮膚科医会かと思っております。今後の発展を心より願うものであります。

30周年に寄せて

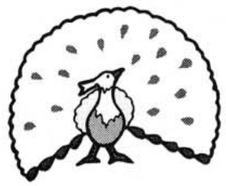
東海大学医学部皮膚科学教室
教授　大城戸　宗　男

薬害エイズ、安楽死事件、抗ウイルス薬ソリブジン事件などの印象は強く、医療不信のきわみにある。介護保険導入時、医療制度が大変化するのに国民が気付いていず、厚生省案に対する日本医師会案など、誰も注目しない。

しかし、大事件の影にかくれてしまうが、全国の医師の活躍はすばらしい。地下鉄サリンで多数の患者を、首都圏の病医院で治療できたのもそうだし、神戸の大震災に全国の医師が、はせ参じたのもそうである。堺市の大腸菌感染者が6000名に及んだのに死亡率は低く、大阪府の医師の能力のすばらしさを証明した。

この様な時代こそ、神奈川県皮膚科医会の活躍が期待される。市民公開講座、市民医療相談などで、アトピー性皮膚炎にみる未証明医学と云うか、いんちき医療に立ち向かう医師の姿勢が最高である。

30年間続いてきた本会が、国民に信頼される医療の担い手の集団として、さらに発展されることを願っている。



神奈川皮膚科医会と私
30年間の思い出

日本皮膚科学会東京支部・支部長
横浜市立大学医学部皮膚科学教授
中　嶋　　弘

神奈川県皮膚科医会30周年、まことにおめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

神奈川県皮膚科医会は、昭和35年11月、大森周三郎先生（警友病院）、三木信之先生（横浜市）、亀田威夫先生（亀田病院）、安西　喬先生（関東労災病院）、野口義圀先生（横浜市立大学医学部教授）、加藤安彦先生（小田原市立病院）らが集い、神奈川県皮膚科懇談会を組織されたのが始まりです。

第１回懇談会は大森先生が警友病院で昭和35年11月26日に開催され、会費は500円、懇親会は万珍楼で行われました。その時はじめて横浜の中華料理の心髄を知り、感激したのを覚えています。以来、万珍楼は今でも贔屓にしています。神奈川皮膚科懇談会はその後第８回をもって神奈川県皮膚科医会に発展解消されましたが、その経緯、その後の経過は神奈川医学会雑誌12巻、第１号に詳しいので省略します。

私は第１回神奈川皮膚科懇談会が開催された昭和35年に奇しくも横浜市立大学医学部皮膚科学教室に入局しました。そして、本会の末席を汚してきました。昭和42年１月から同45年６月まで、国立熱海病院に転出したので、その間は静岡県皮膚科医会（北村精一長崎大学名誉教授主宰）に所属しましたが、大学復帰とともに神奈川県皮膚科医会に復会しました。その時、本会の名称が変更になったこと、規約が整備されたこと、会長が代わったことなどを知り、今浦島の思いで時代の流れを認識したのをおぼえています。

神奈川県皮膚科医会は、その後、中野政男会長、加藤安彦会長に引き継がれ、スマートで、アイディアに富んだ企画で、隆盛の一途をたどり、他の皮膚科医会の羨望の的になりました。

私の医師生活を振り返ると、神奈川皮膚科懇談会ないし神奈川皮膚科医会とともに30数年間を歩んできたことになります。それにしては貢献度の少なかった会員であると反省しております。

私の夢は、神奈川県皮膚科医会と日本皮膚科学会東京支部が互いに手を取り合って、21世紀の皮膚科を神奈川がリードすることです。

正夢になることを念じつつ折筆します。

平成８年12月晦日

30周年に寄せて

聖マリアンナ医科大学皮膚科
溝　口　昌　子

神奈川県皮膚科医会が30周年を迎えられたことを知り、これまでこの会の発展にご尽力されてこられた先生方のご努力に改めて感謝致しております。

私は６年前に聖マリアンナ医大に勤務するようになってから参加させていただいておりますので、30年の歴史のほんの一部しか関係しておりません。それも昨今の学会数の急増のため、重なってしまう関係学会があり、残念ながら年３回の例会に毎回出席ということができなく申し訳なく思っておまりす。

神奈川県皮膚科医会例会の講演は、皮膚科に関することだけでなく、文学、社会学と幅広い分野に及び、at homeな楽しい雰囲気があり、通常の学会とは異なる独特のゆとりのあるスタイルが確立されていると思います。神奈川に関係のない方々が毎回多数ご出席されているのも最ものことと思います。

ただ残念に思うのは若い人の参加がやや少なめなことです。最近の若い人は土曜・日曜はせめて自分の自由にしたいという考えが強いようです。自分自身のための時間を持つことは大切なことですが、通常の学会とは異なる例会の楽しさを是非体験してもらいたいと考え、お知らせをいただく度にすすめております。

今回の30周年記念特集号に何か書くようにとご依頼を受けましたが、最近参加させていただいた私には書く資格がないように思います。

この号が発刊されて、30年間の長い間、会の発展にご尽力された先生のお書きになるものを読ませていただくのを楽しみにしております。

今後の神奈川県皮膚科医会の益々の発展をお祈りすると共に、今後会員として何かお役に立てればと思っております。とりあえずは出来るだけ例会に出席し、楽しみたいと考えております。

「私と神皮医会」

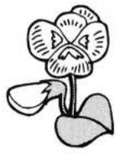
北里大学医学部皮膚科
勝　岡　憲　生

神奈川皮膚科医会30周年を迎えるに当たり、歴代の会長先生ならびに組織委員の先生方のご努力に心から敬意を表します。

私事ではございますが、私は昭和52年に北里大学医学部皮膚科に入局し、外国留学の期間を除いて全て神奈川県内の施設で皮膚科医としての研鑽を積んでまいりました。１年目は聖マリアンナ医科大学皮膚科に出向し、当時主任教授でいらした関　建次郎先生のご指導を賜り、平成３年度から５年度までの３年間は国立横浜病院の医長を努めました。そして平成７年より現在の職位にあります。まさに神奈川は私を育ててくれた土壌であります。神医会には先輩の先生方が多数いらっしゃり、私はまだ若手の部類に入りますが、神皮医会の歴史の2/3の20年近く会員として所属したことになります。今更ながら今日まで何一つとして神皮医会のお役に立つことなく過ごしてまいりましたことを大変申し訳なく思います。つい最近までは学会に参加しても諸先輩の方々を離れて拝見しているにすぎなかったように思われます。従いまして記念特集号への寄稿者としてはあまりにも歴史を知らない身でございます。

そこで神皮会に関する他愛ない個人的な思い出の一部を語らせていただきます。新人として本学会に初めて参加し、症例報告したのは聖マ医大に出向中の時で、演題名は「SSSSの１例」であったと記憶しています。その学会の始まる前の出来事であったと思いますが、当番校の新人として会場整理中、着席寸前の中嶋　弘教授の椅子を引いてしまい、先生は転倒なさってしまいしまた。なんともお詫びのしようがなく恐縮して小さくなっていたことが思い出されます。昨年は「毛髪の医学」というテーマで講演をさせていただき、私にとりまして意義深い機会でした。そして懇親会において、加藤安彦先生から当科のレセプトの問題点について適切なご指導を賜りました。

日頃、私ばかりでなく、当科教室員を温かく迎えていただき深謝申し上げます。県内で開業した本学卒業の先生方も多くなりました。１回生の上村仁夫先生（海老名市）、小幡弥生先生（厚木市）、２回生の金丸哲山先生（横須賀市）、小幡秀一先生（厚木市）、渡会　洸先生（大和市）など10名近くになりました。各先生方が地域医療に日々貢献なさっています。今後は当科としても神皮医会に貢献すべく努力してまいる所存でございます。神皮医会の益々の発展を祈念致します。



30周年に寄せて

平　井　義　雄

神皮創立30周年おめでとうございます。皮膚科懇談会時代にさかのぼると36年前となり、それから本当に長い期間が経ちましたね。初期の箱根仙石原樵山荘、湯本南風荘の泊まりがけの会など思い出はつきません。

会員も神皮懇の時代50名、昭和43年175名、平成８年は410名と増加し、県下の他医会と比較して見劣りしない人数となりました。永年の会長の御努力は勿論ですが、健康保険制度、専門医制度の確立と相俟って皮膚科診療の独立性、専門制が認められたものとして慶賀にたえません。JR、私鉄の駅前に皮膚科専門医が１－２名（大駅では３－５名）開業する時代に突入しています。

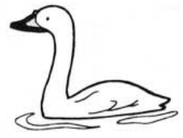
次に例会の演題ですが、昭和50年代前半まではテーマを決めた講演、スライド供覧（症例報告）、それに伊藤実先生の皮膚科漫語、Test Your Knowledgeとバラエテイーを持たせており、健保問題も必要に応じて取上げられていました。私もスライド供覧に症例を発表したり、時に座長をつとめさせていただき、本当に良い勉強になりました。

昭和50年代、東京地方会が４地区に分割され、神奈川地区会が独立し、例会でのスライド供覧は中止となり、例会毎にテーマを決めた講演のみとなり、更に最近は企画委員会が設立され、全国から優秀な講師が招聘され、最新のテーマで講演が開けることは大変有難いことである。小生は専ら耳学問に専念している次第です。

富沢副会長も神皮第１号で述べられていますが、例会に出席するのは会員の1/3で、大体顔ぶれも固定しているのは何か気に懸るとの事、本当に同感です。例会に出席出来ない人のため、出席しても復習のため神皮の発行は大変役に立ちます。今後ともよしくお願いします。

こぼれ話：昭和51年の幹事会での事。安西幹事長より“君、キャバレー遊びはしなかったかねー”、“えっ？”、一瞬どきっとしました。よく聞いてみると会長はじめ、幹事より不審な会計処理伝票が事務に出されていたとの事。間もなく医会の経理事務を委託されていた県医師会の担当課長の使い込み事件が発覚し、１件落着となりました。

医療保険財政改革、医師過剰など医療界全体がきびしい時代に入ろうとしています。神奈川県皮膚科医会が40周年、50周年に向けて益々発展することをお祈り致します。



30周年に寄せて

平塚市医師会皮膚科部会
高　崎　信三郎

神奈川皮膚科医会発足30周年心からお慶び申上げます。

昭和41年７月23日、横浜シルクホテルでの総会、第１回例会と発足当時より会員である私にとっては30年の来し方をしみじみと振返らされる思いです。発足時は県下病院30余、開業27名、他に神奈川在住で県外勤務８名の計74名が入会登録されておりました。

発足当時より症例報告が各医療機関より発表されておりましたが、昭和44年７月より既に本会に入会され顧問となられた東北大学名誉教授伊藤実先生が「皮膚科漫語」のコーナーを担当され、毎回会員を魅了する講演をされ、昭和49年６月まで16回に及び、最後は「土肥慶蔵著世界梅毒史」復習と題して、日本への梅毒伝来は巷説ポルトガル人の種子が島鉄砲伝来に始まるとゆう天文12年をさかのぼること30年の1512年であったことを指摘され、興味深い30分となったことでした。

又昭和48年７月には前記の皮膚科漫語と同時に卒後教育講座が設けられ、Syntex Tanabe社のDermatology News紙掲載のTest Your Knowledgeの五択問題の解説が北里大学西山茂夫教授始め諸先生により行われたのも執行部の努力によるもので実りあるものでした。

更に昭和50年頃よりシンポジウム形式、乃至はテーマを選んで医学以外の関連専門家も含めて数名の講師による講演で綜説的理解の得られるテーマ毎の例会がもたれ、現在に至りましたが、毎回の例会が明日の診療に役立つものとなっており、改めて歴代会長、幹事長始め役員の、御努力に感謝致します。

一方各地区、区、市単位での皮膚科医会設立が10年来続きましたが、平塚地区でも、平塚市医師会皮膚科部会として平成６年10月13日発足、平塚市医師会員（他科の方も含め）及び近隣地区の参加希望者も入って18名で発足、第２回以降テーマをきめて、年３回を目安に講師の講演と、会員の関連症例供覧を行っており、平成８年９月は褥瘡をテーマとして第９回例会を開催しました。又薬疹、ウイルス性発疹症等、テーマによっては医師会員全員に呼びかけを行って、各科との交流をはかっております。

以上30周年に寄せて、本会の更なる発展を願うものであります。

KH—SYSTEM

苅　谷　英　郎

KH-SYSTEMと言うのは前会長中野政男先生が名付けた神奈川県皮膚科医会会員管理システムの略称である。このシステムの一端が会員の皆様の目に触れるのは、例会案内などの郵便物に貼ってある宛名ラベルだけであろう。

中野先生を会頭に昭和62年横浜市で開催された第３回日本臨床皮膚科医学会総会の事務局は、その前年旧中野医院２階におかれた。

「手作りの学会」をモットーにした先生は、当時最新のパソコンNEC-PC-9801 VX21を買い込んで医院２階の事務局に据え付け、Multiplanという表計算ソフトを組み込み総会参加者の事前登録を自ら行い、支部別の参加者名簿まで作ってしまわれたのである。

中野会頭から「総会での勘定奉行に任ず」と御下命を受けた私に「今時、会計係を引き受けてパソコンも扱えなくては役に立たない。パソコンを買って覚えろ」という某先輩の言に騙され、どうせ買うなら中野先生と同じ物をと購入したが、会計の仕事は電卓で充分間に合ってしまった。

パソコンの操作に慣れ、その便利さを認識した先生は、会員の情報管理にパソコンを使おうと考え、現日臨皮副会長の浦安皮膚科加藤友衛先生に相談したところ、加藤先生の友人で「暮らしの手帖」編集部勤務のパソコン名人岩沢弘恭氏を紹介された。

岩沢氏は中野先生の意向を聞きinformixというリレイショナルデータベースソフトを用いて会員管理システムの試作品を昭和62年夏に完成させた。

当時既にパソコンを利用していた斎藤胤曠（当時県立こども医療センター）、藤沢重樹（当時横浜社保中央病院）、原紀道の諸先生と私に中野先生からSYSTEM DISK, DATA DISKと会員番号を付けた会員登録カードが送付され、中野先生以下５人で手分けしてデータ入力を行った。

各自が入力したデータを岩澤氏が一つのDATA DISKに統合して会員管理システムは立ち上がったが、その後若干の手直しが加えられ、昭和63年春に運用は軌道に乗った。

このシステムの機能は多彩で、正会員と賛助会員は別画面で、個人情報は会員登録カード（名簿改定或は新入会の際に記入する）の全項目がパソコン画面に表示され、幹事はその分担職務も判るようになっている。会費納入状況、例会出席簿もあり、印刷機能としては宛名ラベルは全会員宛て、賛助会員だけ、幹事全員、常任幹事だけ、会費未納者宛とか、特定の個人宛ても会員番号を入力すると打ち出る事が出来る。

威力を発揮するのは名簿発行の時で、B４版或は15インチ幅連続用紙に名簿原稿が一発で印刷出来るし、最近では名簿作成に必要な項目だけ抜き出したフロッピーディスクを印刷屋に渡せば殆ど間違いのない原稿ができるので、校正の手間が大幅に省けるようになった。

会員名簿の原稿は平成元年２月の発行の第10版からこのシステムによって作られている。

新会員や会員の住所や勤務先変更が会長宛て届けられると、そのコピーがFAXで送られてくる。その都度追加入力や訂正しておけば、何時も最新情報を取り出す事が出来る。

このシステムも岩澤氏に頼んで何回か改定を繰返した。最近では、ファクシミリの普及と来るべき郵便番号７桁に対応した改定をおこなった。

システムが動き出した時から、中野会長にシステム管理係を命ぜられKH隊長と名付けられた。

平成８年７月の総会で役員の大幅な交代があった。原幹事長に「もういい加減にKH隊長を交代させて欲しい」と申し出たところ、早速後任に宮川俊一先生を推薦され、先生も快く引き受けてくださりKH隊長を無事退役する事ができた。

約８年間大過なくKH隊長を勤められたのは、労を惜しまずこまめに変更届けや入会届けをFAXして下さった中野前会長、加藤会長、時の事務長、永戸みどり、市川悦子、現事務長・稲見加津枝の諸氏のお蔭である。ここに謝意を表する次第である。

このシステムを構築し、再三の改定にご尽力頂いた岩沢弘恭氏は、60才の誕生日を目前にした平成８年５月15日、小腸原発の平滑筋肉腫により逝去された。ご冥福をお祈りする。

その闘病記は「スミスの腫瘍日記」と題してパソコン通信のSIGに自らの手で遂一克明に記録されたが、「暮らしの手帖　69号」に転載されているので、是非一読されることをお勧めする。

30周年によせて

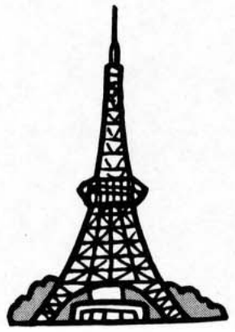
滝　沢　清　宏

加藤安彦会長の手で編集された県皮20周年記念誌をみると、私と県皮の接触は意外と古く、恩師安西喬先生のお伴として、第９回例会（昭和44年７月於湯本南風荘）にゆかたで出席し、症例報告した記憶がある。伊藤実先生の面白い皮膚科漫語と中西淳朗先生の当時の私にとってはどうでもよかった健保の話が懐しい。父の倒産と私の女の問題で開業を決め、多くの方々のご好意で横浜駅近くの小さな診療所を始める前年、鎌倉で行なわれた第55回例会（昭和55年７月）で県皮の主要メンバーに面通しを受けたのが実質的な入会となるのだろう。人生で真の友人は１人でも多く、２人は多に過ぎ、３人は不可能といわれるけれど、県皮への入会以後私の得た友人（私が勝手に想っているのかも知れないが）の数はとても３人にはしぼれない。昭和58年、中野政男会長、加藤（安）幹事長体制になった折、常任幹事編集係に任じられてから苦労が増した。まず『原稿がしめ切り迄に集まらない』『年数回の編集会議が平日の午後に行なわれる』『校正が面倒』などなどであった。この点で私は永戸みどりさんに甚大な謝意を表したい。病を得て辞任する迄約10年間本当にお世話になった。有難度う。時が流れ今や、自己主張の時代から和を以って尊しとする時代に変動すべき時なのだそうである。県皮も大きく成長し、幹事の数もふえた。が、この顔写真（右は畏友原田昭太郎先生）のように、「いつも笑顔で日々を……」といったなごやかな雰囲気で、40周年いや50周年（私はあの世へ行っているかも知れないが）を迎えたいものだ。

30周年を祝す

藤沢市医師会皮膚科医会
武　沼　永　治

神奈川県皮膚科医会が創立以来、30周年をむかえられましたことを心からお祝い申し上げます。
実地医療にたずさわる皮膚科医の集まりであるこの会を維持し、発展させてこられた、歴代会長先生をはじめ、幹事長、幹事の皆さんの御努力に敬服いたします。
小生は昭和57年５月から藤沢で開業しておりますが、最初は私事のよんどころない事情により出席出来ず、比較的例回に出席させていただくようになるのは平成に入ってからでした。
出席するたびにいつも感じることは、テーマに対する切り口の斬新さ、独創性にいつも目からうろこが落ちる思いでした。
昨今、医療情勢は大きく変化しようとしております、在宅医療、患者自己負担増……、影響をまっさきに受けるのは、皮膚科開業医ではないかと思います。
神奈川県皮膚科医会が、会則にある、その目的の一つである皮膚科医の地医の向上、発展に寄与し、今後ますますの発展を続けていくことを信じてやみません。



30周年に寄せて

常任幹事、会計担当
金丸皮膚科院長　金　丸　哲　山

神奈川県皮膚科医会の会計を担当して早、３年がたとうとしています。会は、その10倍、30年も続いているのですね。昭和52年春、北里大学卒業後、西山茂夫教授の皮膚科学教室に入局後すぐ、叔父、金丸三包先生（油壷で皮膚泌尿器科医院開業）に連れられて参加したのが私にとって神皮会との最初の出会いでした。初めは現在と違って、一般演題の発表の場でしたので、第37回例会（昭和53年）で「ジューリング疱疹状皮膚炎を思わせた水疱症」、第39回（昭和54年）では「特異な臨床像を呈した伝染性軟属腫」を発表したのを良く記憶しています。その後、会は現在の様な講演型式を取るようになりました。当時東京地方会神奈川地区分会と言うのはなく、神奈川県での学術発表の場として良く、その役割を果たしていたと思います。懇親会はいつも沢山の先生方が参加し、とても和やかな雰囲気であったのを記憶しています。昔から大学の若い先生達はもっと参加した方が良いのにと思っていましたが、若いうちは自分もそうでしたが、大学での忙しい日々に追われなかなか神皮会には参加出来なかったのが実情でした。開業してからは、自分自身には東京地方会はただただ専門医になるための単位をとるために開かれている様な印象で、興味深い演題も少なく、あまり参加するのに気乗りしなくなりました。それに反し神皮会の年３回の例会の講演は、それぞれに興味をひかれ参加したいと思わせる演題が多く、企画を担当されている先生方には、ただただ頭が下がります。会計業務は不慣れな私ですが、今後共、神皮会の会員の一人として、会の発展を支え、少しでもお役に立てればと思っています。

例会開催状況（神皮創刊号続き）

○…総会　＊…神奈川医学会総会の分科会

例会	総会 分科会	年月日	開催場所	当番	主題
83	＊	H5.12.4	厚木フタムラホール	加藤（禮）	レーザー治療（外科、形成外科、皮膚科）、アゼプチン
84		H6.3.6	関内新井ホール	栗原	痤瘡（ホルモン、脂肪酸、細菌、治療）、アクアチムクリーム
85	○	H6.7.10	関内新井ホール	内山	エイズ（皮膚科からみた臨床、神奈川県下の現状）、アゼプチン
86	＊	H6.12.3	パシフィコ横浜	木花	化粧（女性と化粧、実演、種類、薬事法、開発）、ダレン・カプセル
87		H7.3.5	鎌倉市中央公民館	塩谷 原	皮膚症状と心、皮膚と感覚、皮膚と脳、アシクロビル
88	○	H7.6.24	横浜市市民文化会館関内ホール	加藤（安）	医療と税制、皮膚科診療と経営 第11回日本臨床皮膚科医学会総会・臨床学術大会と共催
89	＊	H7.12.3	関内新井ホール	入沢 宮川（俊）	毛（ミクロの世界、その一生）、脱毛症（多彩な臨床像、円形脱毛症）、アイピーディ
90		H8.3.2	横須賀プリンスホテル	金丸（哲）	膠原病を疑ったら（シェーグレン症候群、SLE、皮膚科医からみた膠原病）、アレジオン
91	○	H8.7.7	関内新ホール	岩井 苅谷	梅毒血清反応、TEN、レミカット
92	＊	H8.12.7	神奈川中小企業センター	日下部 片倉	乾癬（感受性遺伝子、最近の話題・治療法）ボンアルファ軟膏、アンテベート

例　会　報　告

(1)　第89回　例　会

日時：平成7年12月3日（日）

毛——そのミクロの世界
　一本の毛から何が分かるか　　佐　藤　　元（科学警察研究所）

脱毛症——その多彩な臨床像　　渡　辺　　靖（ワタナベ皮膚科）

毛——その一生　　荒　瀬　誠　治（徳島大）

円形脱毛症——病態とその治療最前線　　勝　岡　憲　生（北里大）

毛——そのミクロの世界
一本の毛から何が分かるか

科学警察研究所法科学第一部
法医第三研究室
佐　藤　　元

毛は表皮が特異に角化した皮膚付属の組織で、哺乳類に特有のものであり、毛小皮、毛皮質、毛髄質の三つの基本構造と、毛母基中に存在する色素細胞で造られる色素顆粒の四つの形態要素から成り立っている。これらの形態要素はいずれもその形態により人頭毛の識別に役立つ特徴を示すことから、毛髪の形態検査としては肉眼検査、光学顕微鏡的検査、電子顕微鏡的検査が行われている。

毛の表面に鱗のように見られる毛小皮については、その形状が人獣鑑別及び動物毛の種の判定に役立つことは広く知られており、小皮紋理の自由縁の形状や紋理縁間の距離が検査されている。毛皮質は毛小皮と毛髄質の間の層で、繊維状の皮質細胞が互いに緊密に接して束状に集まり、ほぼ均一な透明な層として観察されるが、そのケラチン・パターンには人種的な差異が観察されているとも言われている。有色毛ではこの毛皮質中に多数の色素顆粒が観察され、検査においては色素顆粒による色調が重要視されている。毛髄質は毛の中心に空胞の連続として存在する層で、人獣鑑別に際しては髄指数が役立つことは良く知られており、また、毛幹全長にわたる髄質の出現形態は人の毛髪の異同識別に有効な識別項目として利用されている。

形態検査に引き続き血液型検査（ABO式血液型検査）及び元素分析の検査（エネルギー分散型のX線マイクロアナライザーによる元素分析）が行われている。

「毛から何がわかるか？」という質問について、その毛が、ヒトのものか、動物毛か、人毛であれば発生部位と、対照すべきヒトの毛との異同識別、動物毛であれば動物種の判定などが検査可能である。また、人毛ではABO式血液型が検査可能てあると言える。

DNA分析が生物学的証拠資料の異同識別鑑定に有効であることから、毛髪鑑定においても識別精度の向上の観点から、DNA型分析の導入が急がれているが、毛髪を検査し、そこから多くの情報を得るという意味ではこれまで実施してきた形態検査に基づく各検査項目が今後も重要であろうと考えている。

○

脱毛症――その多彩な臨床像と治療

社団法人日本毛髪科学協会理事長
ワタナベ皮膚科
渡　辺　　靖

脱毛症は成長期毛性脱毛症と休止期毛性脱毛症に大別されるが、前者の代表が円形脱毛症（AA）であり、後者の代表が男性型脱毛症（MPA）である。今回はこの２疾患について述べたいと思う。

AAは巷間精神的ストレスが原因と考えられているようであるが、筆者の調査ではそのような症例はかなり少なく、ある季節になると脱毛するという症例が多かった。また、乗物酔、肩こり、手足の冷え症などの不定愁訴例、すなわち自律神経不安定例が多くみられた。近年AAは病理学的には自己免疫疾患とされるようになったが、そのトリガーは自律神経の神経伝達物質Transmitterが大きな役割を果しているように思われる。この考えのもとに向精神薬であるテグレトール、抗ヒ剤であり抗セロトニン作用をもつペリアクチンなどの経口投与、それに自己免疫に対してはステロイドの外用を行うことにより、汎発型、全頭型の治療効果は著明に改善された。また、多発型での難治例に対しては局所麻酔薬による後頭神経ブロックを行い効果があった。

MPAに対する育毛剤の効果は余り知られていないが、ミノキシジールあるいはペンタデカン酸グリセリド（PDG）などが開発されてから完全に黒々となることはないがある程度の発毛効果が認められるようになった。PDGでは女性のMPAにも外用させ毛髪直径が太くなることを確認した。育毛剤の外用に当ってはスカルプケアーが重用であることを述べたい。

毛――その一生

徳島大学皮膚科教授
荒　瀬　誠　治

成長期の毛母細胞は強烈に分裂し続けるため、毛は毎日0.4mm前後も伸びる。毛乳頭は肝細胞増殖因子（HGF）やインスリン様増殖因子（IGFα）などを産生し、毛母細胞の増殖を規定している。毛乳頭はまた、毛包の発生、誘導能力もあると考えられており、この現象においては、エピモルフィン、ビタミンA、Dなども深く関与しているようだ。毛周期を毛乳頭側から考えてみたい。

毛包の幹細胞は立毛筋付着部近くにある。毛母細胞はその幹細胞よりわかれた“一定の分裂能を持つ細胞群”である。成長期を通じて毛母細胞は強烈に分裂し分化し続けるため、毛髪は毎日0.4mm前後も伸びる。この激しい分裂は毛乳頭よりの因子が毛母細胞に作用するために起こると考えたい。毛乳頭よりの因子としては肝細胞増殖因子（HGF）やインスリン様増殖因子（IGFα）、etc. が指摘されている。毛乳頭はまた毛包の発生、誘導、性格決定（硬毛、軟毛かなど）能力すらあると考えられており、この現象には、エピモルフィン、ビタミンA酸、ビタミンDなども深く関与しているようだ。成長期は、休止期毛包に残る幹細胞が増殖し毛乳頭を取り囲み新しい毛球部を形成しながら伸長することで始まるが、この現象は毛包の発生過程と同じである。毛周期で見られる各eventsを、毛乳頭側から考えてみたい。

○

円形脱毛症
――病態とその治療最前線

北里大学医学部皮膚科
勝　岡　憲　生

円形脱毛症（AA）の病因・発症機序および今後の治療につき考察する。とくにAA発症におけるアレルギー素因の関与と脱毛および発毛における局所免疫の関与について述べる。

１）自験例を集計し、AAの発症とアトピー素因（AD)との関連性を検討した結果、AA患者の54.0％にADがあり、AAの発症・予後にADが少なからず関与する。また病理組織および免疫組織化学的検討の結果は、ADの有無により脱毛に到る免疫反応の過程の一部に違いがあることを示し、ADを有する個体の特有な免疫状態が、AAの発症や予後と関連する可能性を示唆する。２）AAの発症における免疫学的側面については多くの研究があるが、発毛にいたる機序は不明な点が多い。そこで難治性のAA患者の病変部頭皮をSCID（severe combined immunodeficiency）マウスに移植する系を用いて発毛過程を観察した。長年脱毛状態にあったAA患者の病変部頭皮をSCIDマウスに移植したところ、高率に発毛を認めた。発毛時に毛包上部に多数の細胞浸潤がみられ、大部分はCD４陽性リンパ球であった。さらにRT-PCR法によるサイトカインmRNAの検索では、移植後IFN-r-mRNAが全例において発現していた。この結果から、「移植後の発毛過程において、リンパ球浸潤のlocationとそこでのIFN-γの発現が重要な役割をなしている」と考察する。

３）治療については難治性のAAに対しても比較的効果が明らかな外用療法の一つにSADBE（squaric acid dibutylester）がある。接触アレルギーを引き起こし、発毛を誘導する効果がある。今後の新しい治療として、Anti-TNF-α Antibodyがrhematoid arthritisに試みられているように、脱毛に関与するであろう因子の働きを直接抑制する薬剤の使用を試みる方向に進む可能性があるであろう。

この数年に限ってもAAに関する研究論文は多数あるが、AA発症の初期変化は毛乳頭にあるという説などもあり、その発症機序については未だ議論がつきない。

第89回例会を担当して

宮　川　俊　一

平成７年12月３日関内新井ホールで（ふさふさとした髪のは取り戻せるか）というテーマで例会を開催する事ができました。まさか私が神奈川県皮膚科医会の幹事を担当する事になろうとは思いもよりませんでした。もう随分昔の事です。昭和X年慶応の皮膚科の医局に入局仕立ての頃、まだ大変若々しかったN教授から“おい、宮川君、今度こんな会があるんだけど”と一枚のパンフレット（これが神奈川県皮膚科医会例会の案内状でした）を見せられました。フレマンの私が教授に逆らえるはずがありません。“ハイ、大変為になりそうですので必ずまいります”と言ったかどうだか昔の事で定かではありませんが確か休日を返上して藤沢にでかけた記憶があります。沢山のLuesの症例をスライドでみる事が出来、大変感激したおぼえがあります。そして懇親会の席では大勢の神奈川の先生方の前で汗をかきながら自己紹介をした事が懐かしく思い出されます。見知らぬ大先輩を前にして大変緊張しお酒がのどをとおりませんでした。その後は時間があれば出席する事もありましたが大学で研究に追われたり立川へ出張したりでしばらく御無沙汰していましたが川崎へ参りまして再び医会へ参加するようになりました。そして平成６年、あれは６月の川崎市皮膚科医会の時に幹事長の富沢先生に入澤先生が当番幹事をやるからよろしくといわれお手伝いをする事になりました。テーマは考えておいてね、と言われ、ハイと返事をしたまでは良かったのですがこの伝統ある神奈川県皮膚科医会で今までやられていないテーマでしかも先生方の興味のもてそうなことを探すというのは難しいことでした。しかし強力な企画委員会の先生方が尻ごみをしている私を勇気づけて下さり助言を頂きテーマが決まりその後演者の先生はその道の有名な先生の中から選んでいただきました。委員会の中で医学とは離れますが植毛の話しも聞きたいという話しも出まして用意をしたのですが時間の関係上残念ながら加えることが出来ませんでした。入澤先生には私の思いどうりにさせて頂け感謝しております。当日は134人と多くの先生方に御出席して頂け本当によかったです。講演は緊張のあまりほとんど聞くことは出来ませんでしたがこれは仕方ないと諦めております。また大鵬薬品の方々には打ち合わせ、会場の設定当日の会場でのお手伝い等本当にお世話になりました。例会を担当するという事はそれなりのストレスでしたが先輩の諸先生方が本当に良くできたシステムを作ってくださっており、更に幹事長の富沢先生がわからない点については総て解決してくださるという親切さに心から感激致しました。今後どんどん若い先生方がユニークなテーマで例会を担当してまた当医会の良さを実感してほしいとおもいます。

(2)　第90回　例　会

日時：平成８年３月２日（土）

神奈川県皮膚科医会に参加して

横浜市立大学医学部皮膚科学教室
西　山　貴　郁

第90回の神奈川県皮膚科医会例会は横須賀市医師会皮膚科部会と共催となって、横須賀中央で開業の金丸哲山先生が当番となり、横須賀プリンスホテルで行われました。横須賀プリンスホテルは開業以来まだ日が浅く、内装外壁とも新しい建物で、皮膚科関連の会を催すことは今回が初めてとのことでした。これまでほとんどなじみのない京浜急行の汐入駅という立地上、参加される先生方の数が予想しにくい面もあったとは思いますが、広い会場の席が埋め尽くされるほどの多くの参加があり、盛大な会となりました。

今回のテーマは日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社の共催のもと、「“膠原病”を疑ったら」ということでシェーグレン症候群に関してを東京医科歯科大学の片山一郎先生に、また、SLEに関して国立横浜病院・北里大学の衛藤光先生に、そして「皮膚科医からみた膠原病」ということで川崎医科大学の植木宏明先生に御講演を頂きました。

テーマに沿って、その分野での第一人者を演者に招くことが出来るのも、これまでの当番の先生方のご尽力によって長い歴史の中で培われた神奈川県皮膚科医会の威光もさることながら、今回当番の労を厭わず奔走された金丸先生をはじめ、会員の諸先生の日々の精進の賜と感興する次第であります。今回も、片山先生の臨床像を中心にして、統計や最新の情報を交えたシェーグレン症候群についての話、SLEについて、概論から北里大学での臨床統計をもとにした衛藤先生の話、長期にわたり経過を追うことの出来た症例を中心に統計を提示され、「人間として、まず人格的、総体的存在として拝見する」ことが必要であるという植木先生の話がありました。どの講演も、初心者には膠原病についての基本的な知識の習得に有用であるのみならず、最新の情報を織りまぜることで経験豊富な先生方をも飽きさせることのない貴重な会であったと思われます。

今回の成功を支えてくださった皆様に感謝すると共に、今後も本会のますますの発展のため、神奈川県皮膚科医会会員の全員で力を合わせていきましょう。

(3) 第91回　例　会

日時：平成８年７月７日（日）

第91回例会と30周年記念祝賀行事

苅　谷　英　郎

第91回例会・通常総会は梅雨空のなか平成８年７月７日（日）午後２時より関内新井ホールに於て開催された。

プログラムは以下の通りである。

座長：岩井雅彦先生

１）安木良博医長（都立大塚病院皮膚科）による「梅毒血清反応の過去と今後の展開」

２）遠藤勝巳氏（興和（株））による「抗ヒスタミン作用の強い抗アレルギー剤（レミカットカプセル）と蕁麻疹」

座長：滝沢清宏先生

３）飯島正文教授（昭和大学皮膚科）による「TENをめぐる最近の話題…TENの臨床分類とステロイド加療の可否」

の３題の講演が行われた。

通常総会は田所瑞穂先生を議長に選出し議事の進行が行われた。本年は役員改選の年で、加藤会長の再任以外は、副会長、幹事長、副幹事長、監事の交代があり、幹事、常任幹事の若返りが計られて大幅な交代が行われた。

引続き30周年記念祝賀行事に移った。

加藤会長の挨拶および「神奈川県皮膚科医会創立30周年を迎えて」と題する講演が行われ、次いで中野政男前会長、永井隆吉横浜市大名誉教授、安西喬元幹事長に対して功労者表彰と記念品の贈呈が行われ、功労者を代表して中野前会長からお礼の言葉が述べられた。

この様な祝賀会では著明人による記念講演を行うのが一般的だが今回は趣向を変え、松本熙氏の指揮と曲目解説により東京金管五重奏団の華やかな金管楽器の演奏が行われた。

会場がワンフロアーのため参会者には迷惑をおかけしたが、会場を記念撮影会場、更に祝賀会場にと二度の作り替えを行ってから祝賀懇親会を開始した。

祝賀会は富沢幹事長の開会の挨拶で始まり、神奈川県医師会会長川口良平先生、各科医会を代表して内科医会会長松田文太郎先生、前日臨皮会長安西喬先生、興和新薬（株）常務取締役服部博之氏から祝辞を頂き、永井隆吉先生のご発声で乾杯を行った後、一同会食しながらの懇談に花を咲かせた。

更に日本皮膚科学会東京支部長中嶋弘横浜市大教授、日臨皮南関東山静支部長二宮文乃先生からも祝辞を頂いた。

新役員の紹介と原新幹事長の閉会の挨拶を以って祝賀行事は無事終了した。

ちなみに、第91回例会出席者117名（内賛助会員４名）、30周年記念祝賀会には会員93名（内賛助会員２名）、招待者14名が出席された。

お手伝い頂いた共催の興和新薬（株）の社員の方々には紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

（当番幹事：苅谷英郎、岩井雅彦）

TENをめぐる最近の話題
—TENの臨床病型分類とステロイド加療の可否—

昭和大学医学部皮膚科
飯　島　正　文

詳細は以下の拙著を参照されたい。

１）飯島正文：TENの臨床病型分類について、皮膚臨床、38：887～892、1996

２）飯島正文：GVHRの臨床と病理組織学・免疫組織学－特にTENの臨床病型分類をめぐって、東京支部企画前実績研修講習会テキスト、日皮会専門医制度委員会刊、1996

我々は従来、TENと診断がついたらただちに十分量のステロイド全身投与を行うべきと教育されてきた。しかし欧米では、ステロイドが誘発する敗血症が主要死因であり、TENのステロイド治療を禁忌とする考え方が一般的である。近年本邦でも、TENの治療指針をburn treatment for the unburnedとし、ステロイドを使わない治療が一部の施設では試みられている。このようにTENの治療にステロイドを使うべき否かについては皮膚科医の間にも混乱が生じている。

TENの特徴である全身のズル剥け状態は決して一夜にして臨床症状が完成する訳ではない。我々はLyellの一連の業績と自験例とを詳細に検討し、TENが臨床的に①SJS進展型、②びまん性紅斑型、③多発性固定薬疹進展型の３つに病型分類できること、またSJSとTENとは連続性の病態であって、仏学派のいうoverlap SJS/TEN（SJS進展型TEN）の概念を強調してきた。

当教室において経験したTENの大多数はSJS進展型TENであった。本病型の発症当初はEEMそのものであり、やがて全身に拡大して粘膜症状・全身症状を伴うSJSとなり、やがて水疱形成・びらん・表皮剥離が顕著となってTENに至る。初期の軽症にみえるEEMも組織学的には重症型の表皮型EEMであり、特にiris lesion（虹彩様病変あるいは標的病変）を伴うEEMは注意が必要である。EEM様病変がGVH型組織反応であるか否かの迅速診断、ならびに臨床的正常部生検による病勢拡大の可能性の判断には免疫組織学的迅速診断法が有用である。

TENはCD8陽性Tリンパ球による表皮細胞に対する細胞障害がその本態であり、発症早期のステロイド投与は有効と考える。また病勢拡大が予想される時にはステロイドの大量短期投与を心掛ける。ただし、既に全身がズル剥け状態になって病像の完成したTENにはステロイドを用いるべきではない。

梅毒血清反応の過去と今後の展望

都立大塚
安　木　良　博

学生の講義ならともかく今更梅毒血清反応の話でもあるまい、とお考えの方も少なくないと思う。確かに近年早期顕症梅毒の減少が指摘され、梅毒新鮮例との遭遇は実際稀といってよい現状下では、時宜に適ったテーマとはいい兼ねる様にみえる。しかしその様な現状認識にも拘らず敢えてこの機会に梅毒血清学を取り上げる理由は、近年続々と開発されている新しい抗トレポネーマ抗体検査法についての情報が臨床側にあまり流布されていない状況があるからである。

テクノロジーの進歩に伴い臨床検査が著しい発展を遂げる中にあって、従来我々が親しんできた梅毒検査法にも変化の兆しがようやく顕著となってきた。既に緒方法は依頼不可の過去の検査法となり、今後TPHAも現状の儘継続されるか否かを心許ない状況にある。

TPHAは手技の簡便さ、特異性の高さから優れた方法であることは言を待たないが、反応の担体として固定処理した動物赤血球を用いるため、ロット間再現性に問題を残し、生物材料であるが故の非特異反応も稀ながらみられる。またTPHAその儘では臨床検査自動化の流れに乗り難いなどの事情が重なって、新しい方法の開発が促進されてきた。

近年開発された梅毒血清検査は(1)理論的にはTPHAと共通だが、抗原の担体として種々の人工担体を用いるマイクロタイター法と(2)自動測定法とに大別できる。それぞれ代表的なものを列挙すると次の通り。

(1)　TP-MC、イムノティクルスTP、ラナタイナーTP、ニューセロクリットーTP、セロディアーTP・PA

(2)　エクステルTP、メディエースTPLA、LPIA・TP、ルミパルス、エンザイグノスト梅毒

これらは結果が従来法とは異なる表現でなされるものもあり、臨床サイドとしてTPHAとの相関その他について、知っておいた方がいい点の解説を試みたい。

◇◇ 第11回日臨皮総会　公開シンポジウム ◇◇

アトピー性皮膚炎1995を終えて

横浜市立大学医学部皮膚科
石　井　則　久

アトピー性皮膚炎は皮膚科疾患の中で、市民が最も関心を示している病気のひとつです。このアトピー性皮膚炎について滝澤先生（横浜市）、向井先生（横浜労災）、そして私がシンポジウムを担当することになりました。加藤会頭からシンポジウムの概略（日時、内容等）が示されていたので、座長を決定することにしました。担当者から一人出すことにし、私（石井）が推挙されました。もう一人は私の最も尊敬し、かつ夜の畏友である瀧川先生（浜松医大）にお願いしました。1994年（平成６年）９月の研究皮膚科学会の時に２人で演者を決めました。基準は現在アトピー性皮膚炎患者を診察し、研究し、若く、そして南関東山静支部会員を中心とした人選になりました。治療については非常にデリケートなため札幌の堀越先生にお願いしました。

次に市民をどのように集めるかですが、アトピー性皮膚炎では、市民から色々な質問がでてくることが予想されたので、新聞広告を出し、往復葉書で参加申込を受け付け、その折に質問を書いて戴きました。返信用葉書には参加諾のゴム印を押しました。広告については大島椿の岡田様、豊田様に全面的にお願いしました。紙面をかりて厚く感謝致します。神奈川新聞に１面広告（加藤先生と松村様のアトピー性皮膚炎についての対談と、参加要項、５月25日）、朝日、毎日、読売、東京の各新聞には開催の記事を載せて戴きました。その他、保育園等にもダイレクトメールを行いました。参加諾の押印した紙を豊田様が200枚、私が100枚持ち、関係者に配付しました。

開催までの打ち合わせですが、岡田様（大島椿）から松村満美子様（元NHKアナウンサー、現在フリーのTVキャスター、ジャーナリスト）を紹介していただき、一緒に座長をしていただくことにしました。彼女からは、座長よりはコーディネーターとしたほうがソフトになると助言を受けました。３月（瀧川、古江、岡田、豊田、石井）と、６月（前記５名、松村、西岡、杉浦、川口、加藤会頭）の計２回打ち合わせをしました。決定したことは、スライドを少なく、見やすく、質問は松村様から（市民が演者に質問するという感じがでる）、フロアからは質問を受けない（混乱のもと、製品の宣伝などの予防）、等でした。その他の連絡はFAXで行いました。

応募葉書は計500通来ました。１通で複数参加申込、７円の葉書（50円切手を貼って）での申込もありました。質問（多くは複数）は約300名からありました。それらをワープロに入力し、どの演者に適した質問かを振り分けました。それらの質問に沿った発表（20分）をしていただくと、自ずと解答が得られるからです。各演者の講演後にスペシィフィックな質問を１－２題（５分）、また特に重要、多数の質問は最後のパネルディスカッション（50分）での質問としました。

当日、800名（定員1,100名）の参加者でした。患者、母親、祖父母、保母、医療関係者等多種、多彩でした。

西岡先生は、スライドを数枚にし、市民に語りかけるように講演しました。川口先生はカラフルなスライドを使い明快に解説しました。古江先生はアレルギーの意味を歴史を交えて発表しました。杉浦先生は検査偏重を戒めていました。向井先生は食事制限の基準を実例を挙げて解説しました。川島先生はフロアの市民に挙手していただくことでスキンケアの重要性を訴えました。堀越先生は一番難しく、市民から一番質問のあった治療について分かりやすく解説しました。パネルディスカッションでは演者に壇上に上がって戴きました。松村様から質問、私が補足質問、演者が解答、瀧川先生が解説という形式でしたが、用意した全部の質問はできませんでした。

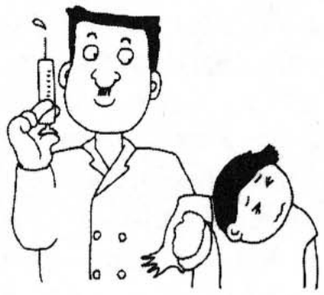
今回のシンポジウムは松村様の参加によって、市民に分かりやすい内容になったと思います。また各演者が時間を厳守していただき（時計係が５分前、３分前、１分前、時間超過のプラカードを演者に示した）進行がスムーズでした。パネルディスカッションの時間をもう30分持てれば良かったと思います。アトピー性皮膚炎はまだまだ混乱の渦中にあるようです。そのため、皮膚科医は来た患者を診るのみでなく、積極的に市民に病気について啓蒙していく必要がある、と痛感しました。ご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

Information

原稿募集

「ざっくばらん」などの文章、
写真　絵　イラスト　何でも歓迎いたします。

以下の様な仮の題にても原稿をお待ちしています。
イ）お宝拝見ーー＞秘蔵の一品
ロ）秘伝＆私の工夫etc、
ハ）うまくならないGolfの話
ニ）こんな誤診をしました、の話
ホ）教授こぼれ話
ヘ）私の近くのこんな店
　　等です。　どしどしお寄せ下さい。



宛 て 先
〒250　小田原市板橋91
日下部皮膚科　日下部　芳　志　　TEL＆FAX 0465（24）0201

会員の声　KAIINNO-KOE・・・・・・・・・・

ざっくばらん

・・・・・・・・・・KAIINNO-KOE　会員の声

続・おどろきモモの木クリニック

平塚共済病院皮膚科部長
宮　本　秀　明

その１。有名人のホームドクター

ある日帰宅直後「今日は岡本綾子を診察したよ」と妻に言うと、「本当？」と怪訝（けげん）な顔をするので、「坂本龍一も中原理恵も飯島直子も受診したことあるんだよ。松田聖子だって、今、水虫で通院中なんだ。」と言うと「ニセ者でしょ」と軽くあしらわれた。「ニセ者とは失礼な。保険証にちゃんと書いてあるんだから。」と言うと、「なあーんだ。同姓同名じゃないの」と一蹴された。そもそも歌手の「松田聖子」は芸名で、本名は「神田法子（かんだのりこ）」であり、むしろこちらの方がどちらかと言えばニセ者なのだ。他にも、鈴木俊一、市川雄一、かとうかずこ、加藤治子、林美智子、高橋由美子、山崎豊子、相原勇ーー彼らは皆私のクランケとなったことがあるのである。ちなみに松田聖子は「まつだきよこ」と読み、相原勇は「あいはらゆう」とは読まず、しかも男性である。このように列挙してみると、有名人は結構平凡な名前が多いようだ。

その２。あいまいな日本語と私

中年の女性の患者に「同じ症状の方はご家族にいらっしゃいませんか」と尋ねた時、「『おとうさん』も同じ症状です」と回答をいただくことがしばしばある。『おとうさん』とはその中年女性の「父」なのか「夫」なのか迷う。普段家族をどう呼ぼうと各人の勝手だが、診察の時位キチンと返答できないのは情けないし、不便である。私自身子供が２人おり、子供達からは「おとうさん」と呼ばれているが、妻はそうは呼ばないし、私も妻を「おかあさん」とは呼ばない。近親相姦じゃあるまいし、「おかあさん」と結婚した覚えは無いからである。恥じらいも無く人前で、自分の妻を「ママ～」などと大声で呼んでいる紳士もいる。普段からその様に呼びなれていれば、夕方仕事場から「ママ、今日はちょっと遅くなるからね」などと行きつけのスナックママに電話しても周囲に気付かれなくて結構便利ではある。が、しかし私のような健全中年には縁のないことである。

世間一般の兄弟間の呼称で弟は兄のことを「お兄さん」と呼んでも、兄は弟のことを「弟さん」とは呼ばないのも妙である。我が家の子供２人は互いにそれぞれの名前を敬称を付けずに呼びあっており、呼称に関しては上下関係はない。

病院の医局旅行で箱根の温泉旅館の宴会を開くことがしばしばあるが、その時にやってくる芸者はたとえ老境の域に達していても「おねえさん」と呼ばれているし、彼女達（若手の芸者がほとんどだが）もうちの院長に「おにいさんもお一ついかが」などと平気で言って酌をしている。もし私が院長にそう言ったら即刻クビかも知れぬが。

その３。お仕事は？

患者さんが全ていわゆる「善良な市民」ばかりとは限らぬ。ある日のこと、見事な背中一面「鯉の滝昇り」の刺青20歳男に、病名と治療法を説明した後、「お仕事は？」と尋ねると、「何もしてない。」とのことだった。「じゃあ、×日後にまた来て下さい」と伝えたところ、「都合悪いんだよ。忙しくてな」とのお答えなので、「仕事してないんでしょ。なのにどうして忙しいのー。」と突っ込むと、欠けた小指を一瞥して「知ってると思うけどよー。俺達もいろいろあってな。」と、のたまう。知ってる訳などないのに。小学生の時の社会科で「お百姓さんの仕事」や「お巡りさんの仕事」は習ったような気がするが、「おヤ○○さんの仕事」は習ったことは無いんだから。ーーと思ったが、無論口にはできなかったし、「その指、工場（こうば）で切ったの？」と尋ねる元気も無かった。

その４。女児の名前

カルテをめくりつつも感じるが、最近の女児の名前で「○○子」というのはあんまり見かけない。数年前たまたま長女の幼稚園の父兄参観に行った時、先生の読み上げる園児の名前はまるでキャバレーホステスの源氏名のオンパレードであった。10数年位前は「さやか」が命名の第１位になったこともあるが、今はむしろ、美咲（みさき）とか、綾菜（あやな）とか、小料理屋の女将（おかみ）みたいなのが流行り（はやり）のようだ。

何年も前の話になるが、わが家の長女誕生の際、さて命名という段に、「『えみり』にしよう」と主張したところ妻の強い反対にあった。「鳩山（邦夫）さんの奥さんだって、『エミリー』じゃん。」と再度主張すると、「鳩山エミリーさんはハーフでしょ。うちの子は違うんだからね。」と取り合おうとしない。「『辺見えみり』ってのも、いるしさ。結構カワイイよ。」と食い下がっても「あの子はクォーター（1/4）じゃないのー。」。なるほど、母親は（「やめて～」〔『経験』という題名の歌なんです〕の）辺見マリ（やっぱりハーフ）であった。妻に取り合ってもらえないので（これが本当の「つまはじき」？）、仕方なく母に電話した。実に情けない夫である。「『えみり』にしたいんだけどさー」と切り出したところ、「お前は昔っから、馬鹿なことばっかり言っている」と、はなから相手にしてくれない。そんな訳で「えみり」案はボツとなった。益々意気軒昂な妻が「だいたい、『えみり』なんて名付ける親なんかいないわよ」と言い捨てて、結局長女に名づけた名前は、以前飼っていたシーズー犬の名であった。

マハリク、マハリタ、ヤンバラヤンヤンヤン……。

その５。あとがき

私の話には芸者がしばしば登場してきて恐縮だが、自らを「フィリピン人と日本人のハーフ」と称する箱根の温泉芸者から聞いた話に少し触れる。その温泉芸者によれば、誰でも知っている少女漫画の魔法の呪文「マハリク、マハリタ、ヤンバラヤンヤンヤン」という言葉は、発音が原語とは少し異なるものの、「私はあなたを愛します」という意味のタガログ語なのだそうだ。酒席の話し故、真偽の程は不明であるが、横山光輝先生に一度聞いてみたい気もする。ところで横山光輝といえば、「鉄人28号」も「水滸伝」も「マハリク、マハリタ、……」も皆、横山光輝原作だということにお気付きだろうか。一方、同じような変身少女漫画でも、「テクマクマヤコン・コンパクト」の「ひみつのアッコちゃん」の原作者は横山光輝ではなく、バカボンのパパ風に言えば「赤塚不二夫なーのだ」。

（次号に続くか否かは限りなく不明）

神皮会　川の流れのように

加　藤　禮　三

突然の手紙でした。

その時、私は事の重大性に気付いていませんでした。

それは、神奈川県皮膚科医会（神皮会と略）からの一通の封書でした。封筒の中には、例会の出欠席の葉書と幹事会の出欠席の葉書が入っていました。何の気になしに出にマルをして投函しました。幹事その物が分かっていなかったのです。（もっとも現在でも分かっていませんが）

そして、当日ノコノコと出掛けたのです。幹事会に出席したまでは良かったのですが、そこに座しておられた先生方は、とても私とは掛け離れた方々で場違いの所に来てしまったという焦燥感で、座りごこちの悪かった事を覚えています。その上、新人挨拶となっては、何を言ったのか今でもその時の事を思い出すと赤面いたします。もう十何年も前の事です。

昭和63年、春はまだかの時期に中野政男会長からお電話をいただきました。「次の次の神皮会の当番を引き受けてくれ・・・」との要請でした。「はあー　えーえええええ」と驚きを隠せませんでした。なんとも失礼な返事をしてしまいました。「12月のことだからゆっくりと考えて、皆ともよく相談して頼みます。廻（メグ）さん（当時、藤沢市民病院皮膚科部長の廻神輝家先生、私の先輩に当たる）とも相談して」と電話は切れたのですが、私の心中は穏やかならず、患者ほっぽらかしてすぐに藤沢市民病院へ電話をしたのでした。あの時の患者さん達、藤沢市民病院の所も私の所もとんでもなくご迷惑をお掛けしました。お詫びいたします。かなり慌てていたのです。

ちょうどその頃、当地区秦野伊勢原に皮膚科の会を作ると言う話がでていました。この会は後に「丹沢皮膚の会」となりますが、これについては別稿の丹沢皮膚の会をご参照いただきたい。

私達に与えられた神皮会は第67回であり、丹沢皮膚の会の第２回（第１回は同年６月開催）と合同開催ということで神皮会から了解を得ました。

それからが大変です。丹沢皮膚の会の発足準備と神皮会の運営準備と並行して、何回となく会合をもちました。

そして、老人をテーマにして東京医大の老年病学勝沼英宇教授と、筑波大の皮膚科学上野賢一教授にお願いいたしました。

会場は伊勢原市民分化会館の小ホール、日程は昭和63年12月４日（日）と決定しました。

春から秋そして初冬へと、伊勢原開催の話が出てから時の経つのは瞬く間でした。

当日は朝から落ち着かず、早くから会場へ出かけていきました。そのほうが気が楽になると思っていました。

皆、同じ考えだったのでしょう。丹沢皮膚の会の世話人である長島典安、栄枝重典の両先生もかけつけてきました。

しばらくして、幹事の先生方が三三五五お集まりになりました。会議の内容は忘れました。それよりも食事とお茶の支度が行き届いているかどうか心配でした。

そして、いよいよ例会です。神皮会のご配慮で座長等運営をまかされました。時間は刻々とせまり刻々と過ぎ去りました。例会が終ると懇親会です。例会会場と向側の部屋で開きました。

当地伊勢原の地酒「菊勇」が左の先生方に好評を博していました。

そして、散会となり長い一日が終りました。

神皮会の中野政男会長はじめ幹事の先生方大変お世話になりました。

時は流れ昭和から平成へと移り、神皮会も中野政男会長が勇退されました。そして加藤安彦会長が就任され、私も末席で常任幹事を汚すことになりました。

平成５年12月４日（土）第83回神皮会例会を担当せよとのご指示があり、第12回丹沢皮膚の会との合同開催も認められました。「レーザー光線の治療の現況」と題して外科から東京医大の加藤治文教授に、形成外科から日本医用レーザー研究所の佐々木克己先生に、皮膚科から帝京大渡辺晋一助教授に各分野からご講演をいただきました。

さて、当日の話です。会の時間も迫まり演者の方々の中には次のご予定のある先生もおいでになり、私の独断で、さっそく始めさせていただきました。すぐに演者の紹介から進めていきました。ここが後の問題点だったのです。

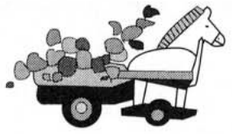
そして、例会は終り、会場の厚木のフタムラホールを後にして懇親会場の小田原厚木ホテルへ移りました。無事に終了したように思いましたが、後々の幹事会で、ある先生から叱責をいただきました。それは例会の進め方についてです。まず会長の挨拶があって、それから演題に移れというものでした。まったくの私自身の落度であり良い勉強になりました。

神皮会は、この流れの中で、中野政男会長が、もう一つは加藤安彦会長が会頭で日本臨床皮膚科医学会を神奈川県が主催するという大イベントがありましたが、これについては、どなたかがお書きになると思いますので、そちらに譲ることにします。

川の流れのように、時も流れました。それにつれて、ただただ筆を走らせてきました。神皮会に入会して、今日まで多くの先生方にお逢いできました。そして、皮膚科の学問だけでなく社会勉強もさせていただきました。改めて御礼申し上げます。

会のますますの隆盛が続きますように、これからの川の流れを造っていきましょう。

どこまでも続く永久の流れを



皮膚科べからず集

横浜市皮膚科医会会長
田　所　瑞　穂

永い間診療に携わっていると患者から教えられることが多々ある。早く治そうと積極的になるより増悪因子を取り除いて治癒に導くことの方がベターと考える。皮膚科以前の皮膚科という観点から「皮膚科べからず集」をまとめてみたい。もとより多分に獨断と偏見に基づく内容なので、御批判と反論は御自由にして戴いて結構です。

1）ナイロンタオルでこするべからず。
2）沐浴剤を使うべからず。
3）柔軟剤を使うべからず。
4）通常の湿疹皮膚炎をアトピーと誤診するべからず。
5）皮膚病を消毒するべからず。
6）辛い者を食べるべからず。
7）餅、赤飯を食うべからず。
8）あくの強い物を食うべからず。
9）青味の魚を食うべからず。
10）コーヒー、ココアを呑むべからず。
11）アルコール飲料を禁ずべからず。
12）ステロイド軟膏を治す薬と思うべからず。
13）入浴を禁ずべからず。

コメント①ナイロンタオルはいつの頃からか木綿のクラシックタオルより多く使われるようになり、更に最近垢すりグッズが数多く出廻り、特に若い女性の間で垢すりが流行している。木綿のタオルでは洗ったような気がしないと云う。その結果friction dermatitis引いてはナイロンタオル黒皮症を来し、肌は荒れ掻痒の閾値も低下してちょっとした刺激で痒みを覚え、然も延々と治らないので受診する例が増えている。余りに多いので摩擦皮膚炎のゴム印を作りカルテやレセプトに利用している。斯かる現状にも拘らず廃止運動の起らないのを不思議に思っている。

②生後間もない乳幼児の全身の皮膚炎や湿疹皮膚炎の増悪難治例にスキナベープ、アルファケリー等が使われている事が多い。以前に勤務していた病院の産科病棟で之等の使用を控えるよう指示したことがあるが、リベートが良いのか看護婦達は使いたがっていた。乳児の退院後引続いて使用している母親も多い。一般家庭で流行している入浴剤も同然で、必ず眞水のお湯で流すよう指導している。

③ファーファー、ソフトアンドドライ等を布おむつに使うと尿で解けて接触皮膚炎を起し、成人でも汗をかく時季に頑固な痒みや緊帯部皮膚炎の原因となる。

④最近アトピーが増えていると云はれているが、私は誤診例が増えていると思っている。何科でも診ているから治りにくい皮膚炎は皆アトピーで片付けている傾向にあり、患者もアトピーと云はれればその言葉だけで納得して了う。その実内容については何も分かっていない。医者の責任も重い。

⑤患者は皮疹の拡大新生を菌に依ると考えてマキロンやオキシドールで消毒し悪化して来る。水虫、趾間びらん症、貨幣状湿疹のことが多い。消毒剤は細胞毒であるからびらん面に塗布すれば悪くなるのは当然である。

⑥皮膚の丈夫な人は何を食べても呑んでもなんともないが、小島理一先生の云われる「皮弱」体質の人は種々の食品の影響を受け易い。私自身も子供の頃から脂漏性体質で色んな食べ物の影響を体験している。カレーライス、胡椒、ソース、唐辛子、生姜等で痒くなったり症状が悪くなったりする例は日常数多く診ている。学校給食の１ケ月のメニューには必ず１回カレーライスが組まれていて、アトピーや湿疹を加療中の子供は必ず掻爬に依り悪化する。大人でも然りである。

⑦餅のほか赤飯、おはぎ、大福、もち米のせんべい等で悪くなるのを良く見掛ける。赤飯が大好きで何回も顔面脂漏性皮膚炎を繰返して受診している患者日く、好きだから止められないので又来ました、と。授乳中の母親が、乳が良く出るようにと毎日餅、赤飯を食べていると赤ん坊に汎発性脂漏性皮膚炎が出来て受診する例も多い。私自身も餅、赤飯が続くと顔がかさかさして痒くなったり、腰回りに苔癬の出現を何度も経験している。

⑧筍、山芋、栗、胡桃、ピーナツ等で痒くなる人が多い。昔から旨い物には毒があると云はれているが此のへんのことを云うのであろうか。此の正月に餅は食べなかったが栗きんとんと甘栗を沢山食べたら、１年間治まっていたアトピーが全身に再発して来院した例があった。

⑨あじ、さば、いわし、さんまの合わない体質の人は非常に多い。鯖の生き腐れと云われる程に皮疹、痒みの増強が見られる。内科でコレステロールに良いからと云われて青味の魚ばかり食べていたら痒くなったと云う。

⑩毎日何杯も呑んでいるコーヒー党の多いのに驚いている。日本茶、ウーロン茶、紅茶など葉っぱのお茶は大丈夫の様だ。にきびの患者にはコーヒー、ココア、チョコレートはにきびの敵と思えと云っている。最近テレビの影響で、ココアを毎日呑むようになったら痒くなったという人も多い。

⑪毎日酒類を呑んでいる人にとっては三度の食事と同じで、私が良く患者に言うのは、アルコールは良いがコーヒーは止めるように、と。

⑫皮膚科ではステロイド軟膏は伝家の宝刀であるが、その効果は一時押えで、自然治癒を助ける力が強いだけで病変の原因療法にはならない。従って止めれば元に戻るので長期使用が問題である。

⑬びらんがあると大抵は入浴を禁じている様だが、びらん面には二次感染ありで私は積極的に入浴をすすめている。陳旧性熱傷、とびひなどわ分泌物を荒い流した方が消毒より有効で早く治る。

紙面の都合で書き残したこともあるが此の辺で止めておく。

県内皮膚科医会の活動状況

(1)　小田原皮膚科医会

ご　挨　拶

小田原皮膚科医会発足にあたって

小田原市　**大　林　　泰**

平成８年11月27日、私達、小田原医師会皮膚科医会（小田原皮膚科医会と呼称）は、当日の医会設立集会に於いて承認され、正式に発足致しました。これ迄、小田原皮膚科泌尿器科医会として、三十余年に亙って、戸沢孝先生が統率され、小田原市立病院在任時の加藤安彦、片倉仁志、両先生等の良きアシストを得て発展。神奈川県皮膚科医会例会にも時宜、ご協力をしてまいりましたが、この程、予て懸案の別れ話も円満に進み、分離、独立した訳です。本会の主旨並びに会則は、概ね神皮会のそれに倣いました。会員は小田原医師会に限定せず、南足柄市、松田町の方にも入って頂きました。また、この入会を機会に皮膚科を標榜なさる他科の先生にも入会を呼びかけて、医会の輪を広げつつあります。

「木を見て森を見ず」の轍をふまない様に、丸ごと人間を見ることの多い内科系、外科系の先生からの貴重なお考えを頂きたいからです。皮膚科診療を共通接点として、情報の交流と親睦が一段と深まることを期待しております。

人事面では、非才をも顧みず、副会長の片倉先生をはじめ、気鋭少壮の先生方の頼もしいバックアップを条件に、私、大林泰が会長をお引き受け致しました。宜しくお願い申し上げます。県医会の常任幹事の日下部芳志先生には幹事長を、戸沢孝之、赤尾明俊先生には夫々、会計、保険部門を担当して頂きます。

戸沢孝先生には、この先長く、大目付け、顧問として、本会の歩みに眼を光らせて頂く所存です。

皮膚科医の前途は、難問、懸案が山積して容易ではありませんが、皮膚科医としての「自負」と「倫理」を根底に、「協調」と「和」を以て、私達、「小田原皮膚科医会」は楽しい運営を心掛ける積りです。当地は県西にあって、お出掛けに不便ではありますが、箱根の奥座敷を控えておりますので、何時の日か、昼間学会、夜は宴会という昔日の姿のリバイバルも如何なものか等と夢見ながら、ご挨拶と致します。

(2)　三浦半島皮膚科懇話会

幹事　小川、峯村、中村(朗)
金丸三包（文責）

第19回　例　　会

日　　時：平成８年６月22日（土）　午後５時30分
会　　場：横須賀プリンスホテル

演　　題：
①　抗アレルギー剤　アレジオンについて。
②　日常よく見られる、しかし注意しなければいけない皮膚悪性腫瘍。

講　　師：神奈川県県立がんセンター　　皮膚科部長　内山　光明　先生

内　　容：皮膚科生検の重要性と疑わしき症例は速やかに皮膚科専門医へ紹介する様に。

次回予告
平成９年２月22日（土）午后５時30分より
横須賀プリンスホテルに於て、山本一哉先生の子どものアトピー性皮膚炎の診かた

(3)　横須賀市医師会皮膚科部会

30周年に寄せて

横須賀市医師会皮膚科部会副会長
金丸皮膚科院長
金　丸　哲　山

30周年おめでとうございます。横須賀市医師会皮膚科部会を代表してお祝いの弁を述べさせていただきます。横須賀市医師会皮膚科部会は平成７年９月21日、第１回総会を開催したばかりのまだ創立１周年、できたてのホヤホヤで、30周年を迎えた神皮会の足元にも及びませんが、第２回例会を神皮第90回記念例会と共催で、平成８年３月２日、横須賀プリンスホテルにて「膠原病を疑ったら？」というテーマで開催する事ができ、また第３回例会を同年９月７日、東京都老人医療センターの山本達雄皮膚科部長をお招きして「老人性皮膚瘙痒症」をテーマに開催し、これもまたお陰様で盛会に終わりました。これもみな神皮会の皆様の御協力の賜物と感謝致しております。まだ会員数30人（内、勤務医５人）のこじんまりした所帯ですが、神皮会の発展と供に歩んで行きたいと思っていますので今後とも、宜しくお願い申し上げます。

(4)　丹沢皮膚の会

その生い立ち

加　藤　禮　三

はじめに、「神皮」第３号と重複する部がある点をお許し願いたい。

丹沢皮膚の会は、昭和63年６月に秦野伊勢原地区で産ぶ声をあげた。年２回の開催であるから、10年目(20回）にあたる。

東海大学皮膚科学の大城戸宗男教授のお薦めで、そして比企野雅典医師会長のご了解の下に発会した。会員は当地区の有志、近隣の皮膚科医の方々にお集まりいただき、そして東海大皮膚科学教室の先生方にもご協力を得ている。

日本皮膚科学会より、平成２年12月14日付で専門医後実績１単位が認められた。

顧問を比企野雅典（前秦野伊勢原医師会会長）大城戸宗男、中野政男（前神奈川県皮膚科医会会長）廻神輝家（前藤沢市民病院皮膚科部長）上野賢一（筑波大学皮膚科学名誉教授）の各先生方にお願いした。現時点では比企野先生は故人となられたので、大久保吉修医師会長にお頼みしている。

世話人に長島典安、栄枝重典の両先生、それに私加藤が加わっている。

例会テーマには苦労するが、できるだけ身近なものをと考えている。

写真は左より　栄枝重典　長島典安　加藤禮三

(5)　藤沢市医師会皮膚科医会

○平成８年度第１回例会

日　　時　　平成８年２月22日
場　　所　　藤沢メディカルセンター
講　　師　　聖マリアンナ医科大学　　皮膚科助教授　窪田　泰夫　先生
演　　題　　皮膚アレルギー性疾患－血管内皮細胞と肥満細胞の役割について。

（内容）培養皮膚毛細血管内皮細胞と血液中のTリンパ球や好中球の接着を介しての免疫、炎症反応について、更に血管炎の臨床、アナフィラクトイド紫斑、壊死性血管炎、結節性動脈周囲炎、ウェーゲナー内芽腫、カポジ肉腫などについてお話していただいた。

○平成８年度第２回例会

日　　時　　平成８年７月17日
場　　所　　藤沢メディカルセンター
講　　師　　藤沢市民病院皮膚科　　巻渕　秀夫　先生、山本　宏三　先生
演　　題　　藤沢市民病院皮膚科症例より

（内容）今回は皮下型環状肉芽腫、男子異所性乳癌、周産期水痘、エクリン汗孔腫、色素性母斑症、結節性硬化症などについてお話を伺った。

○平成８年度第３回例会

日　　時　　平成８年11月27日
場　　所　　藤沢メディカルセンター
講　　師　　北里大学皮膚科講師　太田　幸則先生
演　　題　　尋常性乾癬最近の話題

（内容）表皮細胞を増殖させる因子インターロイキン１、６の話題を中心に、乾癬の臨床像、治療について御講演をいただいた。

（文責　武沼　永治）

(6)　平成８年度川崎市皮膚科医会活動状況

６月27日（木曜）第４回例会　一般演題
10月21日（木曜）第５回例会　一般演題

講演１：しみの統計とQスイッチルビーレーザーによる治療
（村上富美子先生、聖マリアンナ医大）

講演２：頬部皮弁による悪性腫瘍切除、再建
（伊東優先生、聖マリアンナ医大）

会　場：川崎区菅原会館

（文責　宮川　俊一）

(7)　平塚市医師会皮膚科部会

○第７回例会　テーマ「らい（ハンセン病）について」

出席者：25名、日時：96年１月24日（水）　18:45－
於　：平塚市地域医療管理センター講堂（平塚市医師会館）
司　会：栗原誠一

Ⅰ．アイピィディについて（18:45－19:00）
大鵬薬品工業（株）横浜支店学術企画課、豕瀬　悟（いのせ　さとる）

Ⅱ．会長挨拶：高崎信三郎

Ⅲ．講演（19:00－20:05）　講師：杉田　泰之（社会保険相模野病院　皮膚科医長）
テーマ「らい（ハンセン病）について」

【内容の要約】　平成７年の第68回日本らい学会総会において、現行のらい予防法は医学的に誤った解釈を認めるものであり、実情にそぐわない法律であることが学科医の公式見解として発表された。すなわち、らい菌の病原性は極めて微弱で、治療法はすでに確立され、患者への差別や偏見が不当であることが再確認された。これらの現実をふまえ、世界と日本のらいの実情を述べ、さらに、らいを実際に治療する際に注意を要する耐性菌、反応、再燃などの医学的な問題点を述べた。現在の日本でらいは消滅しつつあるが、わずかに残された患者に対し、WHOの多剤併用療法を基本としながら、個々の患者に適した、きめの細かい治療が行われている。全世界的には、WHOの多剤併用療法が流行地での患者数の激減に大きく貢献しており、このような流行地での医療と、日本のような終末に近い地域での医療が相まって、近い将来のらいの完全な根絶が期待されている。

Ⅳ．症例供覧（20:05－20:30）
１．布袋祐子（平塚市民、皮膚科）・Mycobacterium chelonaeの１例（69歳男）
２．栗原誠一（湘南皮膚科）・分節性の疼痛を主訴とした症例（68歳男）
・消毒剤による接触皮膚炎の３例、・PPDAによる接触皮膚炎の３例
３．高橋生世（平塚共済、皮膚科）・第二期梅毒の１例（32歳女）
・脈管肉腫の１例（86歳女）、・上皮真珠の１例（生後４日の女児）

Ⅴ．懇親会（20:30－）

○第８回例会　テーマ「小児発疹症」

出席者：54名、日時：96年５月22日（水）　18:45－
於　：平塚市地域医療管理センター講堂（平塚市医師会館）
司　会：木花いづみ

Ⅰ．ゾビラックス顆粒40％について（18:45－19:00）日本ウエルカム（株）学術部　斎藤友伸

Ⅱ．総会記事（19:00－19:15）
１．事業報告・事業計画：高崎信三郎
２．会計報告：木花いづみ
３．新入会員紹介：高崎信三郎
４．その他、今年度会費について：高崎信三郎

Ⅲ．講演（19:15－20:10）　講師：日野治子（関東中央病院　皮膚科部長）

テーマ「小児に好発する急性発疹症」

【内容の要約】　小児急性発疹症として麻疹、風疹、伝染性紅斑（EI）、突発性発疹（ES）、水痘、単純性疱疹などの古典的なウイルス感染症、手足口病、EBウイルス感染症、Gianotti病、Gianotti症候群などの新しいウイルス感染症、まだ原因不明の川崎病などをとりあげて、その臨床症状を供覧した。EIは、小児では典型的な症状を呈する場合が多いが、成人では関節症状、浮腫など非典型的な場合が多い。ESは、その原因ウイルスがHHV6と証明されたが、最近さらにHHV7も見つかり、これもES症状を呈する。さらにAIDS患者からHHV8が見いだされ、今後の研究が注目されている。風疹、麻疹型の薬疹とウイルス感染症との鑑別はなかなか難しいが、最終的には全身症状、発熱、リンパ節腫脹、皮疹の性状、さらに薬剤については誘発試験など、ウイルス感染にはペア血清で抗体の上昇を確認することが必要である。

Ⅳ．症例供覧（20:10－20:55）

1．川久保　洋（東海大学、皮膚科）・EB virus感染によるGianotti synd.（1.5歳）
2．新関寛二（茅ヶ崎皮膚科）・小児水痘（１歳男）、成人水痘５例、小児帯状疱疹（３歳男）
3．栗原誠一（湘南皮膚科）・塩酸リドカインテープ（ペンレス®）を用いた水イボとり治療、・スプロフェン（スルプロチン®）軟膏による光線過敏性皮膚炎（小児男）、・色素性乾皮症の１例（成人女）
4．布袋祐子（平塚市民、皮膚科）・Langerhans cell histiocytosisの２例（１歳男、５カ月男）、
5．高橋生世（平塚共済、皮膚科）・伝染性軟属腫の成人例（66歳男）

Ⅴ．懇親会（20:55－）

○第９回例会　テーマ「褥瘡の治療」

出席者：34名、日時：96年９月25日（水）　18:40－
於　：平塚市地域医療管理センター講堂（平塚市医師会館）
司　会：栗原誠一

Ⅰ．免疫抑制剤サンディミュン®（シクロスポリン）と乾癬（18:40－19:00）

サンド薬品（株）　学術推進部　大本達也

Ⅱ．講演（19:00－20:20）　講師：杉浦　丹（まこと）（清水市立病院　皮膚科　科長）

テーマ「褥瘡の保存的治療」

【内容の要約】：褥瘡（皮膚潰瘍）の外用療法の原則は、①創傷治癒のための環境づくり（創面の保護、湿潤環境の保持、壊死組織の除去、感染の防御）、②創傷治癒の促進（肉芽形成、上皮化）の二つに大別される。

創傷治癒の環境づくりのうち、壊死組織の除去（外科的デブリードメント、生食洗浄）と湿潤環境の保持（ウエットドレッシング）が重要であり、最近の各種細胞増殖因子を中心とした創傷治癒機転の考えにも合致する。

創傷治癒理論を背景に開発・上市された各種創傷被覆材、肉芽形成促進作用や血流改善作用を有する外用剤、および各種細胞増殖因子やプロスタグランジンなど開発中の外用製剤の特徴を概説し、褥瘡のグレードや病期により適切な外用剤の選択をすることが実地医療の上で重要である点を強調した。

Ⅲ．症例供覧（20:20－20:45）

1．木花いづみ（平塚市民、皮膚科）・仙骨部に生じた巨大な扁平上皮癌（77歳女）
2．岡島光也（平塚共済、皮膚科）・Pilonidal sinusの１例（26歳男）
3．栗原誠一（湘南皮膚科）・褥瘡が悪化したと思われたが、実は消毒剤の接触皮膚炎であった１例

Ⅳ．懇親会（20:45－）

（文責：宮本秀明）

(8)　茅ヶ崎医師会皮膚科部会の歩み

茅ヶ崎医師会内の皮膚科医の仲間は長い間、外科・皮膚科会として活動を続けていたが、生涯教育のさけばれる中にあって樋口光弘、富山良雄、新関寛二らが昭和58年９月10日、第１回の発起人会を開き、都合５回の会合を重ねた上で前記外科・皮膚科会から事実上独立し発会した。

茅ヶ崎市皮膚科医会として昭和59年４月13日設立総会並びに第１回学術大会を開催し、東海大学教授・大城戸宗男先生による光アレルギー入門、光免疫学入門の御講演をいただいた（学術大会の歩み参照）。当日の出席者は当初の会員であった内山光明、坂本忠成、佐藤正市、富山良雄、中島弘、新関寛二、樋口光弘、丸山惣喜、古川健次、吉野裕の他、平塚、藤沢、伊勢原市など近隣在住の皮膚科医に、ご案内し、入会の御承諾をいただいた。朝倉茂夫、天野万里雄、高崎信三郎、廻神輝家、中野政男、加藤礼三の各氏の参加を得た。

又、加納乙丙茅ヶ崎市医師会会長ら計34名の出席を得て、極めて盛会、活気あふれる船出となった。

その後の学術集会は回を重ね過日第49回目を迎え、現在に至っているが、第10回学術集会（昭和62年６月19日）を期に茅ヶ崎医師会皮膚科部会と改称し、過去３年間の実績を基に日本皮膚科学会公認の専門医制度登録学術集会の申請を行い、同63年２月６日付認可され、２単位後実績の学術集会となっている。

本会の特徴を２～３列挙すると次のとおりである。

（新関寛二：ピープル、近隣地区と関連を持ちながら活動：臨床のあゆみNO.54, P.２～３，1991，参照）

1）茅ヶ崎市は県の地域医療策定計画で東海大学病院を２次、３次応受病院に指定、常々お世話になっているし、また茅ヶ崎市立病院皮膚科は横浜市立大学関連病院であることから、現在、大城戸教授、中嶋教授、永井名誉教授らを名誉会員にいただいていること。
2）役員　部会長：新関寛二　幹事：樋口光弘、富山良雄、五島明彦、祖父尼哲
3）茅ヶ崎医師会員は学術集会にどなたでも参加できること、（但し、第１回から第49回までに出席された会員を会員名簿に記載）のみならず近隣地区で皮膚科診療に従事している先生方も含め会員活動をしていること。
4）気楽に質疑し得る学術集会でありながら社団日本皮膚科学会専門医制度委員会公認の登録学術集会で集会ごとに２単位後実績となることも魅力となっていること。
5）集会後講師を囲んで交わす食事は会員相互の親睦を深め楽しい行事のひとつとなっていること。

などが挙げられよう。

尚平成４年度からは、年２回の症例検討会を加え、年５回の学術集会とし、現在に至っている。

平成９年３月で当部会は、満13周年（第50回例会）を迎えるにあたり、会の歩みを概略整理し（別紙年表参照）、皆様と共に喜びを分かち合いたいと思う。
当部会の爾今の発展を祈念し、益々の生涯研鑽の場になり得れば、望外の幸いである。

平成８年12月吉日
茅ヶ崎医師会皮膚科部会
会長　　新　関　寛　二
幹事　　五　島　明　彦

―年　表―

茅ヶ崎医師会皮膚科部会学術集会の歩み

回数	開催年月日	主　な　テ　ー　マ	講　師	出席者数
1	昭和59.4.13	光アレルギー入門、光免疫学入門	大城戸宗男	34人
2	〃 59.8.11	接触皮膚炎と薬疹	永井　隆吉	35
3	〃 59.12.17	これだけは知らないと恥になる	内山　光明 富山　良雄 新関　寛二	32
4	〃 60.6.19	最近復活しつつある皮膚病	大城戸宗男	32
5	〃 60.9.18	内蔵疾患と皮膚病変	西山　茂夫	27
6	〃 61.1.21	皮膚感染症における診断法	中嶋　　弘	35
7	〃 61.5.29	アトピー性皮膚炎と環境因子	大城戸宗男	52
8	〃 61.9.16	ヘルペスの診断	新村　真人	37
9	〃 62.2.24	副腎皮質外用剤による副作用	中嶋　　弘	37
10	〃 62.6.19	皮膚科最新の治療	大城戸宗男	36
11	〃 62.11.17	老人に多い皮膚病	内山　光明	34
12	〃 63.2.9	皮膚細菌感染症と最近の梅毒	松尾　聿郎	36
13	〃 63.6.23	薬疹の基礎と臨床	池沢　善郎	35
14	〃 63.10.19	接触皮膚炎の診断と治療	大城戸宗男	31
15	平成1.2.23	皮膚科余話	中嶋　　弘	29
16	〃 1.6.15	皮膚癌の診断治療	石原　和之	32
17	〃 1.9.21	乾癬の治療	大城戸宗男	28
18	〃 2.2.8	金属アレルギーについて	中山　秀夫	68
19	〃 2.6.20	アトピー性皮膚炎を中心とした小児皮膚疾患	斎藤　胤昿	46
20	〃 2.12.2	第20回記念会（神奈川県皮膚科医会、第74回例会と共催） 1）角化と角化異常 2）皮膚真菌症診断と治療 3）歯科金属とPPP 4）Necrobiotic xanthogranuloma with paraproteinemia	石橋　康正 西川　武二 栗原　誠一 竹原　和美	154

回数	開催年月日	主　な　テ　ー　マ	講　師	出席者数
21	平成3.2.27	抗ウイルス剤によるヘルペスの治療	新村　真人	34人
22	〃 3.6.25	診断に苦慮した症例：中毒疹、エリテマトーデス他	樋口　光弘 富山　良雄 新関　寛二	26
23	〃 3.10.24	思い出の症例：癌の陽子線治療他	上野　賢一	28
24	〃 4.2.18	黒い皮膚腫瘍	長谷 哲男	32
25	〃 4.4.21	症例検討会（診断例） 1）スポロトリコーシス 2）ケラトアカントーマ 3）海綿状血管腫 4）成人水痘 5）痒疹の冷凍療法 6）手足口病の登校問題について他	樋口　光弘 富山　良雄 新関　寛二	9
26	〃 4.6.24	光と皮膚	大城戸宗男	32
27	〃 4.10.22	膠原病の皮膚症状	溝口　昌子	26
28	〃 4.11.16	症例検討会 1）重症アトピー性皮膚炎の治療 （子供の場合 成人　〃 2）BCC３例 3）Keratoacanthoma ２例 4）青年性浮腫性硬化症 5）蜂アレルギー症例 6）蚊アレルギー症例他	新関　寛二 樋口　光弘 金指　麦子	8
29	〃 5.2.4	難治性アトピー性皮膚炎の病態と治療	小川　秀興	30
30	〃 5.4.19	症例検討会 1）ジアノッティ症候群 2）成人水痘 3）疥癬 4）SK３例 5）ボーエン病 6）BCC２例 7）Paget 病他	富山　良雄 新関　寛二 樋口　光弘	8
31	〃 5.6.21	皮疹のみかた　診断困難な症例を中心に	石井　則久	28
32	〃 5.9.20	研修会 1）抗真菌剤ラミシールについて 2）痒疹の冷凍療法について 3）SSC症例 4）BCC〃 5）Keratoacanthoma症例	宮城　浩司 新関　寛二 樋口　光弘	11

回数	開催年月日	主　な　テ　ー　マ	講　師	出席者数
33	平成５.10.20	１）HLAと臨床医学（皮膚疾患を中心に） ２）抗ウイルス剤、アラセナA軟膏について	小沢　明 坪井佐知代	22人
34	〃 5.12.7	１）リザベンによるケロイド、肥厚性瘢痕の治療 ２）最近の形成外科のトピックス	新関　寛二 長田　光博	39
35	〃 6.2.9	アトピー性皮膚炎のとらえ方	西岡　清	35
36	〃 6.5.17	接触皮膚炎の診断と治療	本田　光芳	32
37	〃 6.7.22	光線過敏症最近の話題	上出　良一	23
38	〃 6.9.29	目でみる小児皮膚疾患	西村　昴三	23
39	〃 6.11.8	症例検討会 １）SLE ２）Seborrheic keratosis ３）BCC ４）Lichen planus様の角化症 ５）Kaposi's varicelliform eruption ６）水疱状皮膚炎 ７）椎茸皮膚炎	富山　良雄 樋口　光弘 新関　寛二	9
40	〃 7.2.21	坑酸菌症-らいの現状について	杉田 泰之	14
41	〃 7.6.20	症例検討会 １）Lichen planus ２）Xanthogranuloma ３）成人still病 ４）Herpes simplex ５）Strawberry hemangioma ６）Bowen病 ７）ムチン沈着性脱毛症 ８）伝染性軟属腫－焼灼法の問題点 ９）帯状疱疹を３回繰り返した症例 10）アナフィラクトイド紫斑	樋口　光弘 富山　良雄 新関　寛二 祖父尼　哲	12
42	〃 7.6.20	免疫抑制とウィルス性皮膚疾患	川島　真	19
43	〃 7.9.13	ホクロの癌について	森島　隆文	22
44	〃 8.1.23	症例検討会 １）伝染性軟属腫 ２）Herpes simplex ３）色素性痒疹 ４）アミロイド苔癬 ５）帯状疱疹の疼痛対策 ６）薬疹 ７）ボーエン病 ８）アナフィラクトイド紫斑	樋口　光弘 新関　寛二 森田　上 祖父尼　哲	10

回数	開催年月日	主　な　テ　ー　マ	講　師	出席者数
45	平成８.２.20	Ⅰ　総会 事業報告及び事業計画 会計報告 Ⅱ　アトピー性皮膚炎　最近の考え方	川口　博史	27人
46	〃 8.5.21	顔面・頭部の皮膚腫瘍	川久保　洋	16
47	〃 8.7.16	症例検討会 １）ダリエ病 ２）いぼ状病変（左内眼角） ３）疥癬　44才女性 ４）光過敏性皮膚炎 ５）ゴーグルによる皮膚炎を強く疑わせた症例 ６）尋常性乾癬の治療 ７）レーザー治療について ８）くも状血管腫の治療 ９）高齢者のSCC 10）成人の伝染性軟属腫	祖父尼　哲 樋口　光弘 森田　上 五島　明彦 桜本　敏夫	9
48	〃 8.9.13	ヘルペスウイルス感染症 －水痘・帯状疱疹ウィルスを中心に－	本田まりこ	24
49	〃 8.11.19	症例検討会 １）結節性痒疹の治療 ２）毛孔性紅色粃糖疹 ３）Actinic keratosis ４）Blue nevus ５）フトラフールによる薬疹 ６）Bowen病（右第２指） ７）同　（外陰部、大腸癌の合併）	新関　寛二 樋口　光弘 祖父尼　哲 富山　良雄	10
50	〃 9.3.2	アトピー性皮膚炎の治療（その１）予定	新関　寛二 椿　俊和 飯倉　洋治 佐藤　誠治 堀尾　武	

編集後記

厳冬の日本海に重油が流出したり、ペルーのリマでは今なお85名程の人々が人質に在り、国内では景気が今一つで、医療を取り巻く環境も益々厳しくなりつつあります。(H９.１.)

さて、ともあれ30周年記念誌と言うことで、今回の神皮第４号は、先生方の絶大なるご協力を持ちまして、無事できあがった次第です。原稿をお送りいただきました先生方に、心から感謝申し上げます。また、今回の第４号は、前任者の新関寛二、内山光明、両先生のこ尽力によって出来たと言っても過言ではありません。重ねて感謝申し上げます。

さて、これからが、新広報委員の出番となっていく訳ですが、既にお気づきの通り、“神皮”は“我々の神皮”であって、“読まれる神皮”を作るのは、実は貴先生（そうです。才能豊かな先生、あなた自身）なのです。

ぜひ、楽しい、魅力ある、また　為になる物、夢を見させて下さるような物、原稿、絵、photo、イラスト、etc、何でも大歓迎でお待ちしております。

そして、皆が待ち遠しくなるような、“読みたい神皮”へと定着して行くことが私達広報委員の夢です。

広報委員長　日下部芳志

神　　皮　（第４号）

1997年２月　発　行

発　行　神奈川県皮膚科医会

発行人　加　藤　安　彦

〒235　横浜市磯子区磯子3-7-29

電話　045-751-4573

印　刷　有限会社　長谷川印刷

電話　045-711-5286